

春城隨筆

昭和六年第一月起筆

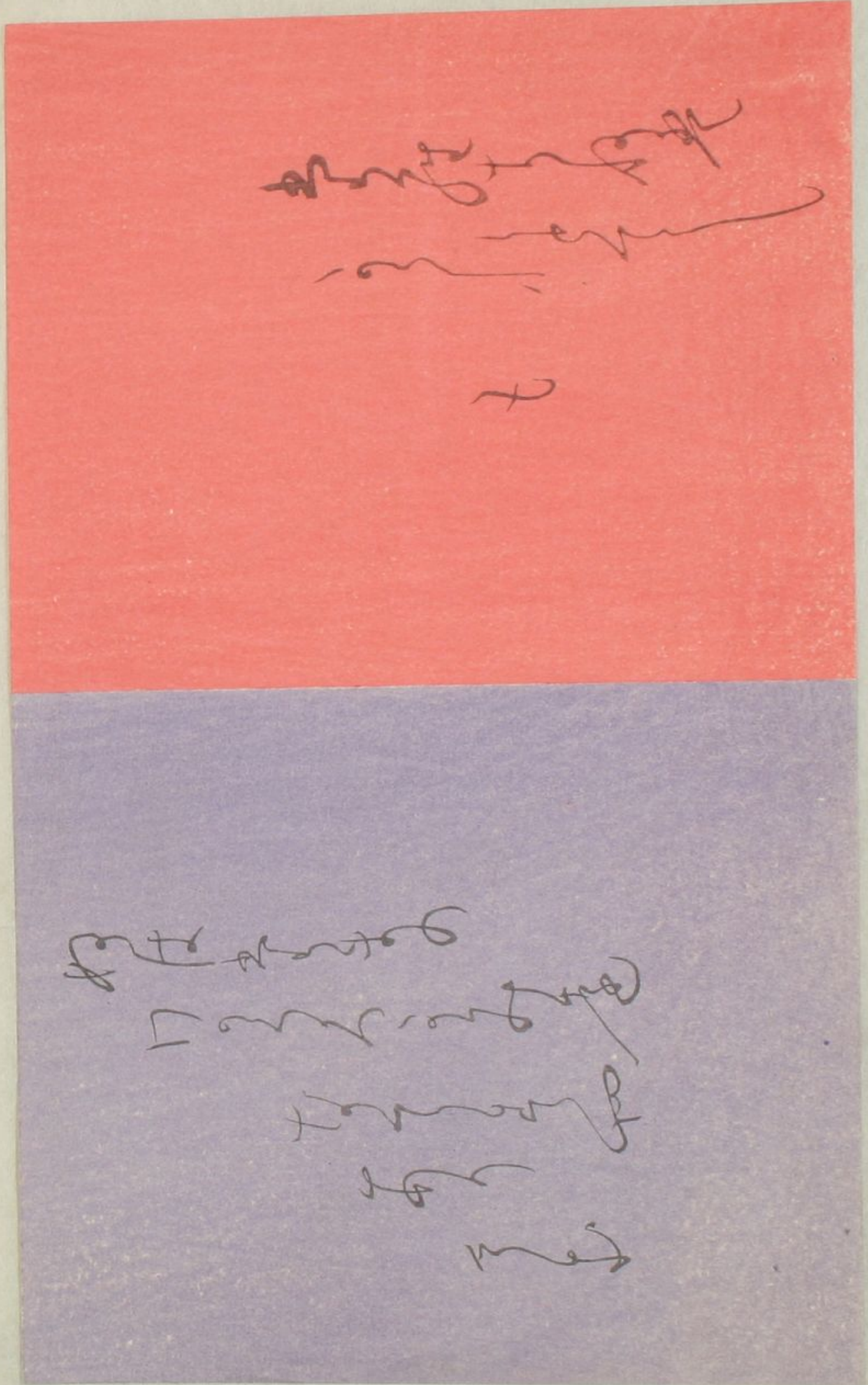
特別
14
1919
398



春城逸書

昭和三年一月起筆

○此頃俄依(何とも)字を(ま)り(な)す(書)架(二)十(五)
 個の(印)道(を)納(め)茶(室)の(一)階(に)置(く)紙(体)心(を)
 負(こ)示(す)の(名)画(ある)故(に)地(を)一(と)撮(影)せ
 一(と)即(ち)老(に)杖(ち)る(の)こ(ん)也(此)古(架)稀
 視(す)ん(ば)既(に)斑(り)び(び)段(段)あ(り)清(初)の(よ)と
 思(ひ)こ(み)米(市)筋(の)記(を)立(言)う(と)全(て)漏(れ)あ(り
 たる(日)似(たり)我(の)他(の)一(者)架(聯)絡(し)たる(う)ら
 思(ふ)ん(だ)と(古)画(を)即(ち)採(り)し(て)又(る)言(ふ
 徳(中)る(る)も(の)似(たり)





李古本有一嘆誰似癡
 頭君不見長安永寧
 家破垣誰復修



妙意獨追求生想蓬山二
 千秋怪君何處得此本上
 有極玄寒具油巧偷真景

李古本有一嘆誰似癡
 頭君不見長安永寧
 家破垣誰復修



○余が三十年来於て觸れし經し給る隨筆類の
もの書出數個に充ち巻數の多しもの多きを爲
の當つて教正理を減りたることあり、近年
隨筆を出收三四に及び往々材料を此
等雜考に得んと欲するも殆ど無き故に
も採閱するに艱み手をつけざるもの數る書
の多しある、大体五冊位のもの有るを改め表紙
裏に筆名の年月を記するを例とし或ハ
數十冊標題を改めたるものあり、双鱼堂
の劃り如き五十數巻に及び、頃者數段の
圖表の目録を録し終り、終に此の隨筆
數の整理に及び、五冊毎に書名異なる爲

め之れを理するに頗る困難を感し一室を以て
録地多きをまじふ紛亂の書冊を排列し漸
やく同一書名のものを併せ、まゝと同時の目録
を作りたるもの百二十種に及び、一種五冊平
均と算すれば六百冊あるべきに元也、十年
以來の筆類最之意味あるものあり、その
より前のもの切替の相好も存するを便
にそのゆゑをせんとも、燒棄するも惜しき氣分
て且々々保存するにことごとく、此の隨筆の
二十四年来の日誌の數書とあり、外に家老
の二十種あり、隨筆の日誌に家老のありん
ハ、總じて家考の約千冊を約ハ、教正の圖

此の大部分は即ち是れ也
 ○年改まり心七新なり、本年潤を得六巻著し一
 巻を刊行せんことを謀し、試みたり又収むる也
 事項を採り、差あり四十件、試みたり七八合の皆
 福あり、毎の著書に此の心可なり、恐らくは冊
 の分量あるん、他の冊の材料相ちなり、今を以
 ち、古く考き略し、一巻を採り、翻ては、養子
 を得人歟

- 一〇 讀書八境
- 一〇 白浪初年文藝家
- 一〇 白浪初紙の紙
- 一〇 福地根之の伝存評
- 一〇 古本書屋
- 一〇 山陽書問集を以て
- 一〇 頼山陽の人氣あり、所以
- 一〇 山陽逸事、一二
- 一〇 古本書屋の得る書
- 一〇 道過文藝談
- 一〇 長井雲妹
- 一〇 海邊存亭

、〇 和宮

、〇 木戸侯

、〇 菅原氏

、〇 吉田車

、一 扇子

、〇 鏡

〇 節分の振家

〇 岩室と小木の増す

〇 牧野家の義太夫

〇 猫いりず

一 白蟻

〇 ビスマークヘリング

、カボヤ ハムレット

〇 柳酒

十島基

車西酒のふし

〇 卯酒

〇 朝兵と新多

〇 無駄花

〇 普賢の前提

〇 松方とレニン

冬家古の舟

〇 野口英世

米田母八の佐傲

中島村

〇 林永春の詩

田中伯の和歌

〇 自分と流版

一 結婚祝賀流版

一 前田家とモリソンの青物屋

○ 薬用の方

○ 印人の米モシ方

○ エビキ因講

○ 路次の趣味

○ 爰玉子

○ 林詠老の詩

○ 日本ウーレン

○ 十和田湖

○ 市琴

○ 庭園の記

○ 加治川の橋

○ 道邊デ

卷菱湖の手記

○ パンドール

○ 女印の涙

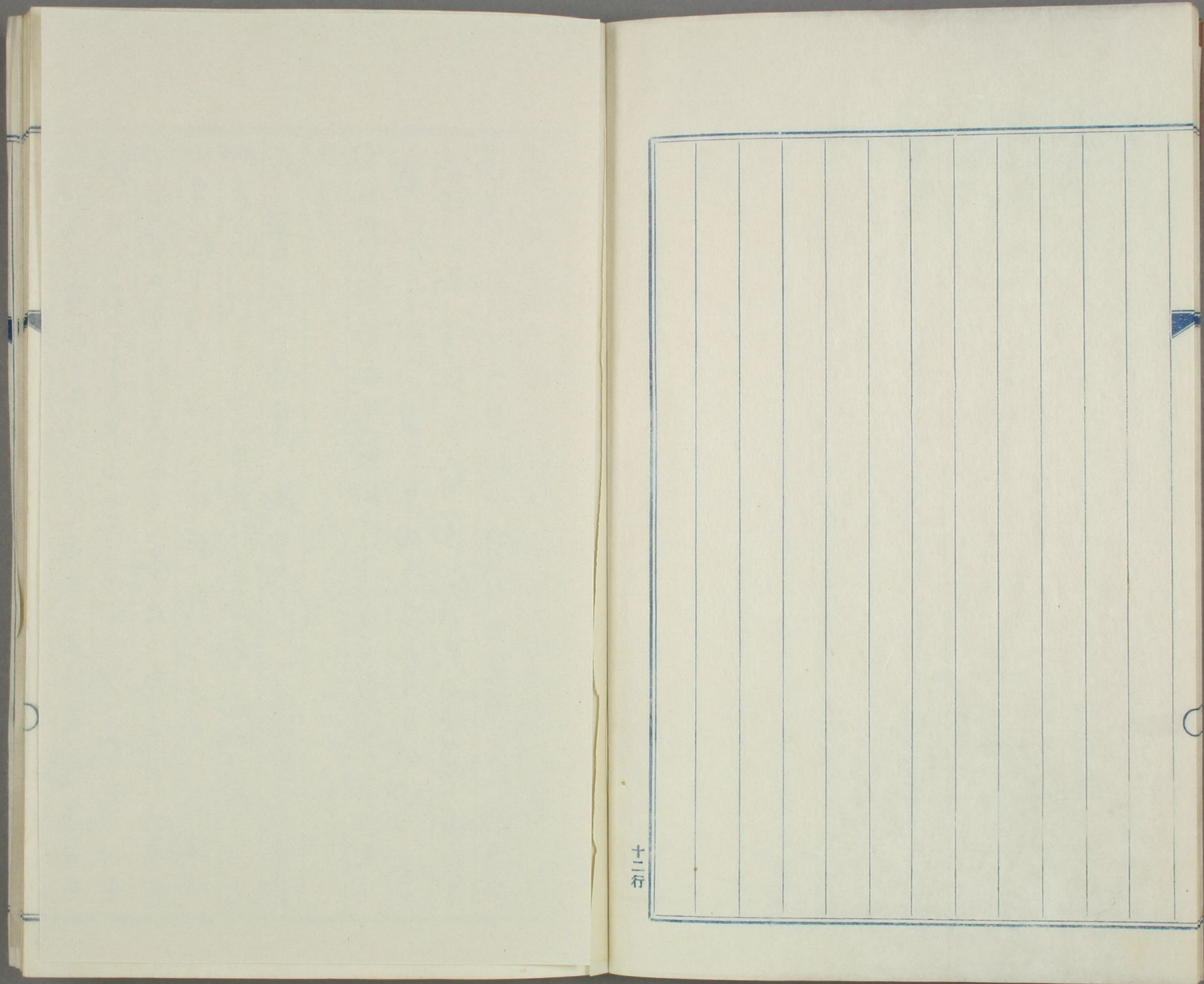
○ 去田東伍の死

○ 百道二朱

○ 守田彦丹

○ 細川潤次郎 徳孝家

○ 津改東陽 女流歌人



十二行

○昨年重柄が台湾に渡りし時愛玉子を贈るに形も上流なうまいよといふは其の意の委曲なる時の旋子と勸めてあるが其の意はやま他をさきとて重柄に頼む所の左の如き解説をよりて来たるをいふてかむのしこ九八余の次の随筆にぬめんとこゝと流りつておく

○北総山の徳心とおおの中いさくの流が此の如く一山とある山田とあるを境内(徳心の志業である)とあるの如く大の志業といふは志業に向つても直橋大娘ひを告ぐしてゐるといふ北山田の婦は御堂屋敷村のめい御堂村の

志業の親友があらけりも其の性格は志業と異つて頗る皮肉の意がある、久も服さるゝといふ其の好に循環してこそは彼を、如きゆか産んたといふ、貴徳の事い難い事である。

○夫友十鷹将元凱、厚徳村出身、改進黨時代、の政友である、いつぞや鷹将は自今の鷹姓ハ而趣いあるといふは、此の如き、雅也、記さぬともあるのを、此の如き見し、如き姓ハある、此の如き

○山田とある征露の意の秘意が暴露に及んでおろか、あの露の事を考へると、真に夢のこゝとくである。あれは、大玉をお手な、露を定むるの如

我南局に於て成業ありは又相違するべしと勝
敗の故現はかりの河越にそそく天甲が敵程に侍
ふものもある。然るに臨海にそそく内はハルテツク
艦隊が臨海の宿艦と連絡しはしむるべしあるに
しう、旅順攻圍軍が後れに黒木軍と合はしは
野戦に老練に不利に無つたにせしむるべし、あの敵軍
がもう三月も経つたに日本は財政に支へたに
あふらうか、定て運命ははかりかぬものもある。
敵は勝つても償金の得えらうに、お露國が
敵を捕はしむるをも日本は抵抗か出来らう
ものも希にあらざるべしあるに、國民は内情を
知らざるはからん情を漏らしぬ温都の敵を去るに

所を焼打をやつた。堀の将軍は文藝に在りて
：載せしむる時の事、○の内は、時の花相を根
かきの智を弄し大金山の発見を怒りしと内情
人と欺きしは、後集の手段とす。此ことが載
つておふ山好むさい此の考、信満を圍りか行
内々海を遊撃す。此とある、亦旅順臨海
が秘定しむる屋かつたは、為るは、我聖上の勅諭
を極まりしは、かゝるに、就ては、當時を、の年、も、い
ろく、觸んたこともあるが、城内、山好の詩を打
電し、其詩を載せしむる、其詩は、催使の意
を寓し、皮肉のものにあらう。城内、いふ、此の
を得て乃木の、敵死するべしと、恐んたに、あ

が、左もあつとと思はんと、まゝの詩。

百原波雷天亦勢合園守歳首尾横
物神利高以基城一岸終屠族順候

昨夜夢臨詭順城有心送客供

乃木将申一乘 一言雪

この詩は乃木に書つた九寸五合であること、城内
の申の説のことともある。

○三木武吉をもし露玉産カビヤ一鐘を貯くもカビ
ヤは穀の卵也粒ねこ似し書星一一種の塩
辛、酒の下物としてカビ也麴也をヤセと切
リバタをつけ、その上を酢し、サシ、シモン汁
をわけし食するを法とす、價高きもの也

○カビヤは性熱に温すと云ひて、多く食へば鼻血を
出すと云ふをみる、カビヤは性熱を和くするもの
と云ふカビヤ、キースを人の肺に奉け、カビヤを
ぬめども散り敷験を感ず

○天保二年、カビヤを三年分母に、こゝろ一歳を
重候とて七十、今を以て、此のいれが散り古稀といは
るゝの感、いかにあつ。いつか一年をさすと、いかに先
づ死すゝ海人といふ自殺の氣が、こゝろ、海人に
あつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、
改築、築をいかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、
いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、
二年をいかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、

七一五三二の箇所に、海峽の北に、
間が三岐を越え、遠く、
去る地、
早く、
味を感ずる、
心、
の元旦以来、
十二行

は洋装本の目録、
洋装本の目録、
改、
附、
よ、
の、
も、
を、
あ、
か、
と、

の二年、日若くは執事、如く能く、如くは、
四府津の赤倉に泊す、如くは、
中本年の戊辰の年、日若くは、
去年の四家の本卦返り、六十一年の辰歳
ハ、元元年、と維新の初一年、
日ハ、島田伏見の戦、
甲と薩長甲兵を交へて大勢、
今年本卦返りの戊辰、
帝御、
良も出す等、
その幼少、
寺、
今、

齡ハ、
そ、
ハ、
多、
西園寺、
を、
申、
を、
遠、
也、

これよかと思儀は保あさえてのて、齋あさるあ
しと斯うしこれと語えんれ

○西洋のハ無花果を女の性殖器を象表する
よのころうのてある、其形強の似てある所からど
こじも聯想が陰器に及ぶのハ無理なるのか、こ
のを言ふ事ありし人をも罵る時ハヒツグ
といふのハ人の故う知らるることである、日本ハ
陰器を形どするハ、親指を次指とホ三指との
間を挿してとみ五指を屈するのてあるが、西洋
ハヒツグといふて人も馬鹿野郎と馬ととき
ハ矢張り、同じ形を心のて相手の前に差出し
てヒツグと罵り叫ぶのである。

○心理学の研究が進々進々あるつゝ、まを應用し
潜在の意義を考辨することが行はれて来た、
人間の本能を中柱として考へんハ、何れも性
慾、愛、怒、かゝるものハ、形、色、味、香、味、触、
々文節さんておて、さ、實ハ性慾を意味し、
れうを体ひあることハ善し少くあるの。古く
天漢ハ此見地から肉を研究してあるとか云
ふが、未だ悉くくくくへてもあるの。或るを肉也
のニあると云、肉ハ篆字、有けハ陰器を表
象するものなるへる易の女子陽の也、この肉
易ハ即ち陰陽があるを云く得るものもある
まの、保し一つの理論をいこまむ也、押し

何ぞ致しんか、箱のようとするは、性々誤りなり
このこと、殊しくする。西洋人の研究する此の
為め不可なる無地がある。詩人カウナルは此の
聖書のあつたと云ひ、ウオルヅワナルは妹
と情愛が深かつたといひ、美を心直りな採つて
性慾関係の材料をあるとする。如何
らうものもあるが、説者の如く、肉体的の情交
があつたと云ひぬ、多の母を慕ひ妹を親と
かあるの、如何なる真面目でも、母実は無意識
の間に性慾関係の情が潜在するのといふ
しめるが、果してかく解することか、正物を
得て居るか、あつたか、四の足は、やがて、誤りなり

一律に推論し、子母なることかある。西洋人の性慾
関係が、天賦の情であるから、以上のことを推論し
起るものがあるが、一概に之を是とすることか、
あるものか、あつたか、一月七日記
○段々献まゝの草を、塩に漬けて曲げ、挿入
んが、このものを、形状にメジメ、似て居るもの
較々異なる所あり、味は、さうさう、メジメは優
る、皮に、乳し、草花を、つけ、ハ、トンギロといふ
とかや、魚泥の、深山に産し、極めて、獲る、あつた
さう、この、新内の、鋸屑の、如き、割き、是、居る、
之を、殊と、いふ、多く、膝、こ、上げ、得、あつた、いふ、
行の、草、界の、殊、殊、と、いふ、可也、
此、草、一名、
ナメコ、といふ

潮來節

笑軒居士

客秋香取、鹿島の水郷に遊びし時。香取神宮前の杉香樓笹川屋さ
いふ旅館の主人越川悠助氏は、頗る書畫趣味を有し多く書畫を藏
するとき、しかば同樓に泊りて主人悠助氏に一覽を請ひしに、氏
は直に快諾せられさりかへひきかへ夜は深更に至るまで敷しれぬ
ほど示されぬ。何れも名ある方々の書畫にて、書は國學者の筆に
なりしもの多く、その特に余が珍らしく思へるは櫻東雄の長歌な
りき。その折伊能大人の潮來節を短歌によまれたるものありき聞
きしかば、一覽したしと云ひしに、ざらば寫してお送りせんよ約
されしをこのほどおくられしかばそのまゝ左に。

潮來節は寛文年間潮來の里の蓬萊屋の遊女須磨代と
いへるが作りしなりとか申し候。宣敎權中博士伊能
穎則大人（香取神宮神職）戯れに之を正雅歌に譯さ
れたるものに御座候

第一章 いたこ出嶋の眞菰の中にあやめ咲くとは
しほらしや。

眞菰おふる潮來の里にさき出で、色なつかしき花菖
蒲かな

第二章 ぬしはわし故わしは主ゆるゑに人に恨はな
いわいな

君ゆるゑに君もわれゆるゑ世の中をうしとぞ思ふ人のと
かくに

第三章 しばし逢はねばすがたも顔もかはる物か
よ心まで

あひ見ねばしばしのほごにかはりけり姿のみかは心
さへにも

第四章 さまよ鹿嶋に神あるならばあハせ給へよ
いま一度

あられふり鹿嶋の神に祈るかな音たえ来てし人を戀
ひつゝ

第五章 空とぶ鳥が物いふならばたより聞きたや
きかせたや

飛鳥の物をしいは、戀しきに言づてもせんこと傳も
せよ

第六章 あふた夢見て笑うてさめてあたり見まは
し涙ぐむ

逢ふと見て嬉しき夢のさむる間に我影ならぬ影のな
きかな

第七章 主の來ぬ夜ははや寝て夢に逢うておもひ
を晴したや

こぬ人を待をらんより早く寝て夢に見むこそ勝りた

るらめ

第八章 口に云はれぬわたしの胸よそれに分らぬ
むりばかり

ことに出て得こそは言はぬ思川くみ見てだにも知ら
ぬ君かな

第九章 裾を捕へてこれ聞かしやんせ實じや誠じ
やうそじやない

言ふことのいつはりならぬ證をばひかふる袖の涙に
を知れ

第十章 人を頼んでかうじやといをかただし打明
け話さうか

人によりて言や傳へんうちつけに我は思ひをわれと
告げばや

第十一章 日ぐれ日ぐれにあなたの空を見てハ思
はず袖しぼる

夕暮の空に君しもすすなくにうち詠めつゝしぼる袖
かな

第十二章 ふつと日がさめ抱しめ見れば主と着て
寝たよぎの袖

あふと見てさむる枕に抱けるは君とかづきし衾なり
けり

第十三章 愚癡かこうじて背中とせなか明のから
すが中なほり

思ふには恨むる事をまけにける明むとするに背きか
ねつゝ

第十四章 なんぼお前がうは氣じやとても眞にほ
れたが知れぬかへ

天雲のよそに見るともなとひなく思ふ心はしるくや
はあらぬ。

第十五章 朝な夕なに枕がかはる枕かはらぬ良人
ほしや

川竹のよごとにかはる小枕の主さだめてはいつか臥
すべき

第十六章 こは神崎森のした楫をよくとれ船頭
どの

かち取よ心せなむ千早ぶる神のころのあるわ
たりぞ。

第十七章 香取神風こちらへ吹かせぬしが歸りを
とどめたい

舟路より君はゆくめりかどり瀉神風吹て浪も立こね

第十八章 めでためたのわか松さまよ枝も榮え
て葉もしげる

行方の浦の松が枝しげりあひて榮行御代にあふが樂
しき

以上旅歴「集古」に載せたる本物味に於て正歌集歌
● 餘毫あるを愛ふ。 一月廿六

○ 自合の経歴に關する文書の若干を大まかにア
ハムに贖りつけたるものが一冊ある、是れなるもの
支那社時代筆に罪を過せたるもの、其類不
の宣告を受けたる判決書のや、衆議院演説
：市初に於ける書物類をとりわぬものあり、いつそ
や其類の多きが甚だ難しむるものあり、
か、紀念の爲め判決書を一字一語の極めて掲載
せんと思いつき、此アハムを右方披かしたるが如
くして見せらるるものあり、此頃フト古書
とせし大行本の中から出て来たもの、自合の

経歴の關する文書は可成り多し、此等につけて
置くに保存の便利と爲し出して、せしめ、
の希世の状(三四三枚)や、銀器恩賜の書内
の公文や、早大が余の官官像を以て、此等の決
議の通文状や、各卷に於ける推せんものや、
回書場等の或は函状や、各卷に於ける推せん
状をとりまゝに録し、此等のもつた、まゝに
地を有してあるもの、此等のものを披かして
保存せんことを欲し、再び此アハムを以
てせんことを思ひ、此等のものを披かして
こゝろ、其の表に、塊存経歴文書と題して、
かつて四十官余に出る、自合の経歴に於て

子淡浦ありものあるけんも、第一自伝を編
 ちん坊入りの年月を、此文書に據るの身は
 かりを家り、業難いものある



エナイテッド・アーチスト社映畫
ガウチヨウ 全十卷
 エルトン・トーマス氏原作、ロッタ・ウツツ氏脚色
 エフ・リチャード・ジョンズ氏監督
 ガウチヨウ グラス・フエアバンクス氏
 山の娘 ループ・フエッス嬢
 山の娘(幼女時代) ケレーヌ・クリーパー嬢
 山の娘(成人時代) イヴ・サザン嬢
 神官 ニーゲル・ド・ブルリエー氏
 略筋——世界の峻峰アンデスに近く、奇蹟の行はれた聖地があつた
 ので、此處に壯大な社が建てられた。そしてそこには美しい娘と善
 良な神官とが住んで居て、社を守り多数の参拜者は神の功德をた
 えてゐた。此の町の近くに掠奪の名人でルイツと云ふ悪代官があつ
 た。ルイツは此の町の噂を聞き部下に命じて財寶を掠奪させやう
 とした。恰度此の時、ガウチヨウは部下を引きつれてアンデスの險
 を越えてゐたが、途中圖らずも美しい山の娘に出會ひ、楽しい旅を
 續けてゐたが、途程中、ルイツの横暴を聞き込み、彼は奇
 略を以て敵を征服した。が彼の心は怪しく社の娘に引きつけられた。
 之を見た山の娘は嫉妬のあまり彼を刺さうとした、彼は危く虎口を
 逃れたが、天刑病者の毒手になつて、煩悶に煩悶を重ねた。それを
 救つてくれたのは美しい社の娘と願かな神の力とであつた。山の娘
 は怨のあまり終にルイツの一味に密告してガウチヨウを逮捕させて
 つつたが、社の娘とガウチヨウとの潔白を知つた時、乙女心はかき
 亂されて悔恨の涙に濡れた。彼女は町外れに露營してゐるガウチヨ
 ウの部下に急を告げて、ガウチヨウを救はうとした。
 説明 石野馬城 徳川夢聲 伴奏曲目選定 買洞喜代治

して敵を逐過する地南南決、さるる支那の田
 軍と追懐せしむる並に南米の群牛、その
 一國の或る島を以て數く其の所墻壁皆を
 破る、人カ之んをたふすも能はざる概あり、
 角ニ焚薪を束束おと敵を逐過する事
 田草の夢想せざる所、一月九日記
 茶道に湯候の大切といふと同一く酒も燗が大
 切である、酒の味の可なり、燗の味も可なり、
 酒、乃ち酒に於て酒候を察すること、大切である、
 此の可減の於察、茶に於て鳥か、雛子の卵を脱せ
 んとする、又の刹那を察して、燗に完全な破る所
 謂、呼吸に加へて、酒候に於て、之ん、均しい

吟案が無けんばるゝぬ、斯いつて置くか酒候とをよ
 名もたし十日日本流の燗に限らぬ西洋の
 概ぬ冷酒を飲ぶから燗の名客が無へか又
 久而一酒候もある、齊しく葡萄酒の白葡
 萄酒の冷を貴ぶ、氷を盛つて若くは葡萄酒
 の瓶を冷して氷を定ぬ瓶に注ぐも酒も七
 の、未葡萄酒の之れと又ある、あの温夜を
 するともつて、多しとある、前日大燗の
 直しの聊々温りを加く、此等も又張り酒候
 あり、故に酒、琉球の泡盛を冷む飲ぶ、薩
 摩の焼酎の飲ぶ、高松の依り酒器
 の相違するが、日本酒の概ぬ燗をすることか
 十二行

例の酒候は専ら温むの如く、實際酒の
 人の外も酒候を測却して、あるまゝの**熱燗**と
 ぶ、是れが酒の旨味を換することを知らるゝの
 ぶ、**熱燗**がくまゝとせ、燗のたぬれ名燗の
 するの又酒味を欠か、台所の離れ家、燗を
 して客に供する場を、持運公途中、燗が
 さめ味を失ふること、誰れも知る事ある。
 とこ、燗を煮る直すか燗のあつた燗のや
 り直しのよのよのひるゝ。どうして初回、
 燗を煮るのひるゝて酒の味が、燗の
 酒味を煮るのひるゝて酒の味が、燗の
 要する、**熱燗**湯に酒器を入んて、燗を煮るこ

ハ急激の場々普通やることであるけんも、よくある
宮中御儀は熱せざる湯に長く酒蒸を口入れつて置く
ことが必要條件とせんし、斯くすれば湯の行
行き滞りしころから、熱湯に酒蒸を入ると早く過
する積ひあるが、早く冷却せしむれば、往々温氣が行き
こたらず、酒蒸の上下で不平均が起る積ひある、故り
又熱せざる湯に長く温めることが確たる大なる條
件と思ふべし、いつかや甚至所司令に臨んば時酒の
味がひどくよかつた、熱湯に酒蒸を入れば、永く温めを
保つておれば、湯をすくとすべし、又これらに或る
湯の湯に徳利を八分を三分も温めると云ふれ、
但し酒の燗かき出れば、酒蒸を判するのテ

ストは、どうであるか、時々の計るもの一法がある
うが、酒蒸を温湯に入れて小泡の立つのを程とすべ
しと、或る通人ハ云ふに、夫人の流しに、酒蒸の徳利
に酒を入る前、銀を瓶の底に千回、酒を瓶
に、酒蒸を温湯の中に入れて、小泡の立つたのを湯か
え分温めれば、陶磁の酒蒸に移すべしと、説くを、
へは、この式を温めれば、酒を試みれば、酒は少し微温
に、火に比かき思ふれば、保つ味、よかつた。要す
る、ちく温めること、長く温めると、故り熱しきい
の、温氣が全体に行き直ること、が酒の味を、
押せしむるの、大切の要件、あるかと思ふ
九月九日記

○同者と受押のりからきく。更なる同し菟集を條り
及す先ありきるんまの志かしと。うゝを同者返因を
今と誰の難いと見く。教條の書宛本から古版
同者の書本荒干。こんを古版の標本を條り

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

とき、山宿太が事業上大切の場をお難に依
 つて強を桂に面令り、以て証得るもの、現在の人、
 一、銀子が歎く、雨路宿太を、宿太を、
 から、めを、宿太の性根のやつから、
 云ふ、よふから、宿太の性根のやつから、
 あり、う。……先南日本を、
 の自由の許せ、え、え、え、え、
 あり、婦人の口を、
 つ、此、お、
 を、
 (二月九日 日記)

○四考を、
 的、
 本心、
 版、
 の、
 皆、
 又、

- 一 山宿太が事業上大切の場をお難に依
- 一 銀子が歎く、雨路宿太を、宿太を、
- 一 から、めを、宿太の性根のやつから、
- 一 云ふ、よふから、宿太の性根のやつから、
- 一 あり、う。……先南日本を、
- 一 の自由の許せ、え、え、え、え、
- 一 あり、婦人の口を、
- 一 つ、此、お、
- 一 を、
- 一 (二月九日 日記)

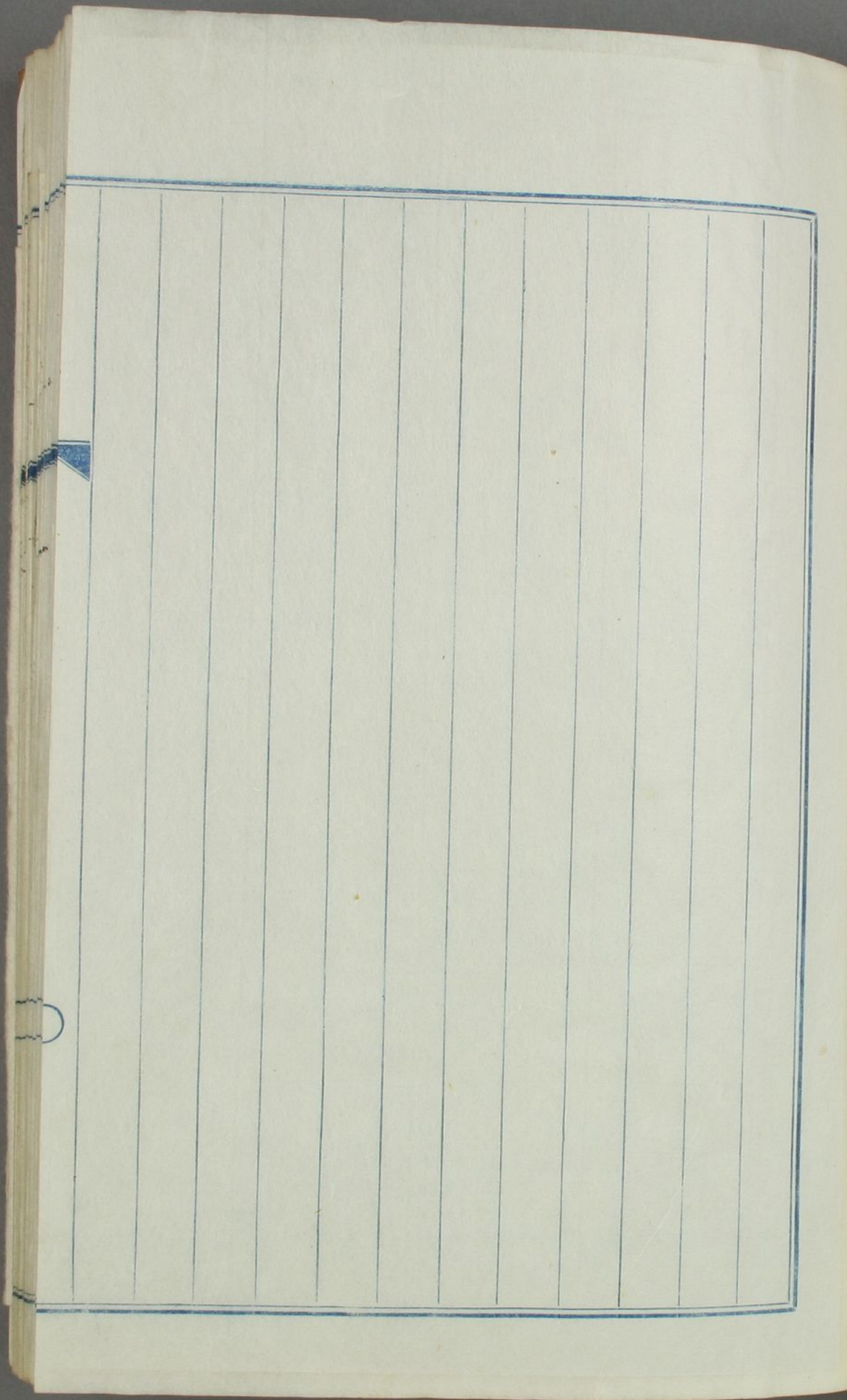
一 島津公下海谷別邸記 攝子

古版空本の道に集めて古版本の標を延を乞ふ
と擬す此類當つて集めぬもの最下なるもの
也、その本を得る内、丹後本義経記あり元
禄の太平記元和寛永頃の産物記あり、外、双
六数枚一枚摺放りよる数紙、何れ七世のものと
とももの改味あり、此等他日天アハハ
装束し娛樂に代せんとする也此亦及不中
間部調を(松巻)の二字類を過り出ると辨れ文云
く厚紙此後と爰し装潢新紙に揚げんとす也
亦大久保湖南の十二泊を録する巻をも七冊に移
海梅潭の別業に題するはるるを元々の用ひ
るのみ余此の人の交りあり、而して其墨蹟家に存

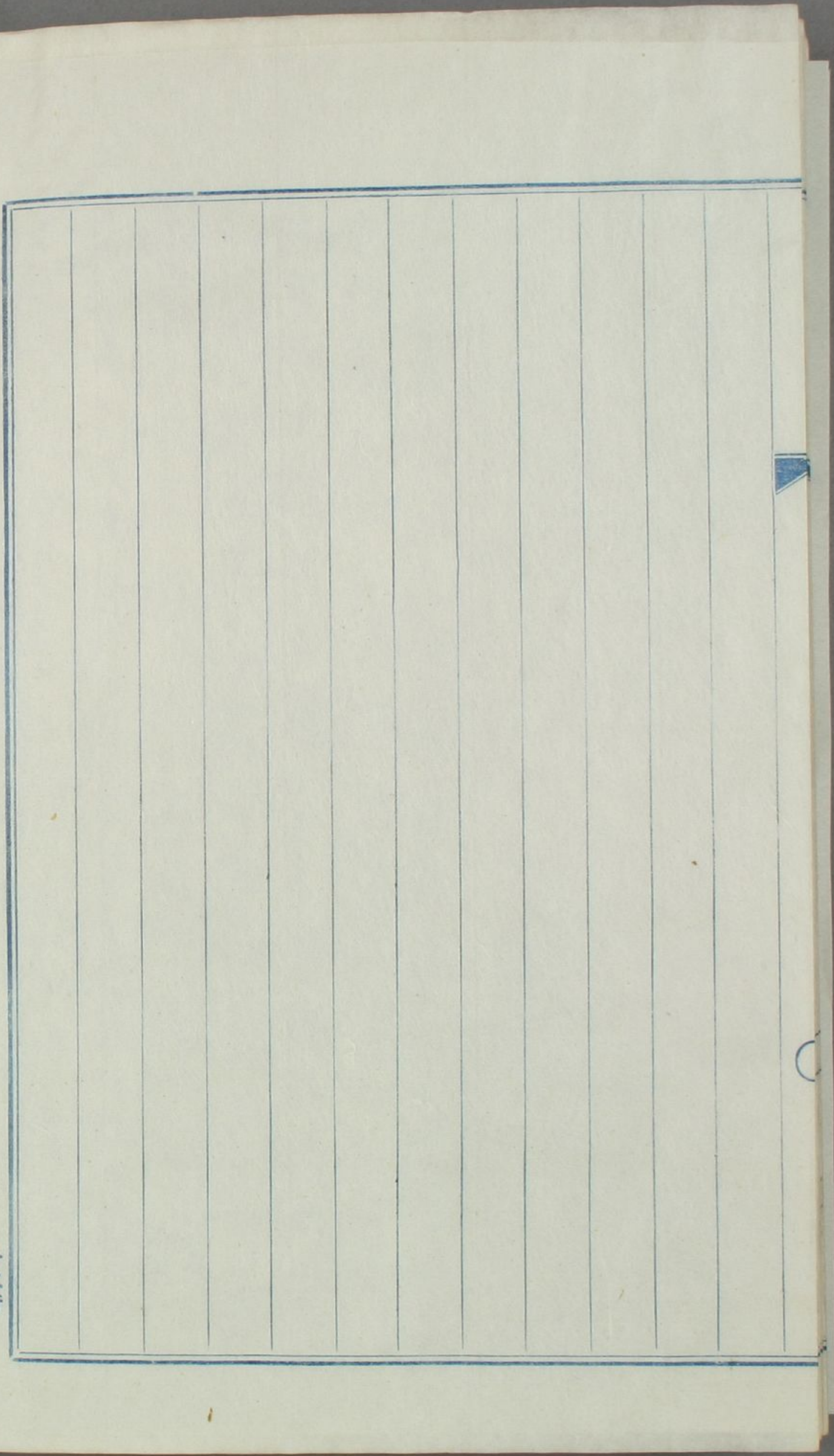
十二行

あるもの僅なるを尋ねる海梅の巻に入るもの
也
一月十三日記

○伊勢の津改東陽の巻ありと亦詩人として知んて
ある、其人の著述の自々夜航詩法と夜航物語と
がある、その見ると此人が堅固しい筆蹟は一方の
よりあるはるる改味あるものあり、ことかその
此の書物の詩法として讀んで面白いのを見ざるから
讀書の家の受けのよいものである。私に此人に就て



十二行



居る。火がボツと煽ると其刺棒からバツと
白い煙が出る、さうすると今濡れたばかりの
奴がカラ／＼になつて仕舞ふ。夫をカラ／＼
にして置くバツと今度は火に煽られた時に刺
棒から煙から残らず火がくツ附いて仕舞ふ。
實に命賭の稼業と云ふのは昔の蕨のお勇衆の
纏持、夫だから若い衆に錢が使つてないと此
手水を運んで呉れないから、屋根の上で不動
様のやうになつて焼爛れて死んで仕舞ふ。火
に弱い強いと云ふのは其所だ。何しろ火先に
向つて立つて居るのだから威勢の宜い稼業。
「ヤイ」と木遣を上げて、昌平橋のお見附
から、眼鏡橋(萬世橋)、彼れを渡つて入つて
来たのは、深川六間堀の七の組、此の七の組
の纏持、辨慶の庄吉に千坊主の丑松。頭取は
常盤町の八五郎、六間堀の峰右衛門といふ。
川向ふの本所深川の蕨の者には二挺梯子と云
ふのはない、一挺しきやア梯子はない。江戸
向は大抵二挺梯子、火事が大きくならなけれ

ば本所深川の蕨の者は江戸向の火事へは出て
来ない。
「庄吉。」
「何だ丑松。」
「三次が纏持に出たと云ふが、井口の油問屋
の大屋根へ上つて火掛りをして居るのは彼の
野郎三次に違えねえ、野狐だらう。」
「さうよ。」
「俺もお前もお互にに組に居られなくなつた
なア誰のお蔭だ、三次のお蔭ぢやアねえか。」
「さうだ。」
「彼の野郎を焙ちまはうぢやアねえか。焙
り殺してしまはう。」
「宜し心得た。丑松、俺に任せろ、此庄吉が
引受けた。」
「マア宜いつてことよ。俺がやつつける。」
「さうか、ぢやア丑、お前に任せて置くぜ。」
「宜いつてえことよ、承知をした。」
火掛りに掛つたらば、不動様だと練名をさ

れた位の火に強い千坊主の丑松が、ピツショ
リ頭から水を浴びて喧嘩仕掛けて来た。元
に組の組合に居た辨慶の庄吉に千坊主の丑松
は、自分達に悪い事のあつたのを翻上げて
三次を逆恨みしてゐる。又七の組一同も、に
組に少し遺恨があるから、本来先へ火掛りを
して居るに組の組合の者に「お早うござす、
御苦勞様です。」と斯う云つて挨拶をしてから
梯子を掛け、屋根へ上るのが當然なのだが固
より喧嘩仕掛だから、叩つて其所へ来てガタ
ンと四間三尺の梯子を大屋根へ掛けた。馬連
臺を右の肩と首の所へピツタリと附けて心棒
を掴み、此棹の先へ鐵が二股になつて附いて
居る、稱へて之を蛙股と云ふ、其方がグイと
上り切つて仕舞つて纏が下になる。梯子をト
ントント／＼と上つて来る。纏で丑松上へ
上り切ると屋根の瓦で這つて落ちるといけな
いから、上り切つた途端に纏の心棒を掴んで
ガタン、ガタンと屋根の瓦を破る。瓦を破つ

た所をチヨイ、チヨイ、チヨイと心棒を退ける
から、瓦はバラ／＼落ちて仕舞ふ、そいつへ
足を突込んでドーンと又先の瓦を打破つてチ
ヨイ／＼と上へ上つて来る。瓦があるから、
屋根から火が附くことはない、屋根裏から火
が附いて家の中へ火が入つて仕舞つて居る。
だから屋根へ穴を開けて置かないと云ふと、
家の中だけ焼けて、スツカリ梁が焼けるに依
つてドーンと屋根が家の中へ落ちて仕舞ふ。
之をじやうごを食ふと云つて蕨の者は一番怖
い。降りて来る事が出来ないで死ぬ人が幾
らもあるから、さういふ事のない様に、屋根へ
火を吹かせて仕舞ふ。瓦を破つては心棒で突
くから下へ穴が明く。穴が明くと其處から下
を這つて来る火がボツと吹き出る。火が廻つ
て居なければ下から火が吹いて来ない、是は
大丈夫だなど云ふことを蕨の者は其處で見て
仕舞ふ。乃てに組の纏の側へ纏の心棒を掴ん
で千坊主の丑松がピタリと立つた。江川町の

千代藏が、猫頭巾の中から見て居たが、ア、俺
を野狐の三次と間違えやアがつて、千坊主の
丑松の野郎が俺を焙りに来やアがつたな、夫
で挨拶をしやアがらねえ。サア焙らば焙れ命
がけだ持つて来い、反對に焙り返してやらう
と思つて居る。ポ、ポ、ポツと、先へ立つ
て居る纏の側へ火が附いて燃え上つて来た。
乃て纏もモウ斯んなに屋根へ火が附くと下ろ
さなければならぬ。先へ上つた纏が一番後か
ら下りる、後から上つた纏が先へ下りてやる
んだ。火先へ、先の纏が上つて居ては熱いか
ら、後から上つた奴が先へ下りてやる。後か
ら上つた奴が先へ下りないと云ふと、先へ上
つた纏が下りることが出来ない。夫だから、
彼奴を焙らうと思ふのだから、後から上つた
丑松が下りない、下りないから何時までも下
りることが出来ない。下りれば自分の耻辱に
なるのだから下りない。乃て下で頭取衆が、
「ヤ、に組の纏を下ろせ、七の組の纏を下

ろせ、下ろせ下ろせ。」
と云ふのだが、二人ながらモウ焙りツこだ
に依つて下ろさない。
所へ黒の大馬に打降り、火事頭巾には金の
鐵形に玉兔の前立をいたし、着て居る火事羽
織は、白羅紗に金糸銀糸を以て織がしてある。
其纏は引く波打の波寄せる波、玉に兎は金の
練、まだ日は暮れないが馬上提灯を腰へ下げ、
七五三纏綿の纏を持ちトツ／＼トツ／＼来つ
たのは南町奉行筒井伊賀守、公用人與力同心
等百四十餘人を引連れて御出張、出火の折の
町奉行は十萬石の御格式だった。タツ／＼と
井口と云ふ油問屋の前で馬の四足を停め、
「下ろせ、怪我をしてはならんから纏を下ろ
せ、下ろせ。」
と町奉行が聲を掛けたが、どうしても下ろ
さない。之を見て居た米澤町のに組の頭取上
州屋秀五郎が、
「太十。」

北國屋太十といふ子分が、

「ハ、ハ。」

「可哀想に江戸町の千代蔵は、三次と間違えられて、元俺の子分て七の組へ行つた千坊主の丑松の爲めに焙られてゐる。」

「ハ、ハ。」

「ア、可哀想に、眼の見えねえ阿母が一人あるんだが、彼れが怪我をしたら阿母が可哀想だ、なア太十。」

「ハ、ハ。」

「手前行つて江戸町の千代蔵に代つて煙持になつて焙りッことをしろ。」

「ハ、ハ。」

「彼奴の親が可哀想だから、…手前なんざア親もなけりや兄弟もねえのだ、お前が死んだつて誰も嘆く者もねえ。」

「大きに有難うございます。」

「本當だ。」

「オヤ、念入だ。…宜うがな、兄弟分の

爲め、組合の恥になるから俺が行かう。」

と頭から水を數百杯浴びて、北國屋太十、同じく是れもに組の煙持、トツ／＼トツ／＼梯子を上つて来る。煙で巻かれて居るから、煙の瓦を這つて行く。息をグーツと呑んで瓦へフーツと息を吹掛ける、さうすると云ふと煙に巻かれることがないといふ。這つて行つてフーツ、フーツ、やりながら来た。煙で側へ来て、

「江戸町、江戸町。」

心棒を掴んで、

「サム、太十か。」

「サアお前には眼の悪い阿母がある、お前に怪我があつちやア阿母が可哀想だ。太十手前成り代つて煙を掴んで、其野郎は千坊主の丑松だから、其野郎を焙りッことをしろと、俺が頭に頼まれた。組合の恥だ、お前親があるのが可哀想だから、サア太十に煙を出しねえ。」

「有難う。だが俺の阿母は火消の娘で火消の

女房で、火消を伴に持つたんだ。お武家様が謂ふ仕事師の火事場は戰場だ。此處で俺が煙を下ろすと云ふと生涯火消で飯が食へねえ。俺が此處で怪我をしたつて、其覺悟は阿母は心得て居るんだから、怪我をしたつて嘆く氣支えねえ。志だけは頂いて置いたから下りろ。太十下りろ。」

「そんな馬鹿なことを云ふな。」

「エーイ俺に恥を掻かせるな。マゴ／＼しやアがると此處で突落すぞ手前を。」

「何を云ひやアがるんだ、手前を助けに来て突落されりやア世話はねえや。宜しく承知した。」

梯子をト／＼ト／＼下りて来ると、長い釣を持つて頭取の上州屋秀五郎が下で待つて居た。

「太十此ん畜生、何故代つてやらねえんだ。手前のやうな不實な野郎はねえ下りて見ろ、打ち殺して仕舞ふぞ。」

火事江戸の元とて歌りん此頃、男み肌の消防連が
お月と冒険も敢てし、一先惜ちる難、此れ此れか、彼
等、武士するも、武士もい、とて、其現を、お月し、後
息熱の火市場の硝煙漲る、敵物と一般、煙ハ彼等
が、隊隊、煙ハ、必、多、た、た、危、険、の、を、あ、ら、さ、る、可
い、之、れ、を、持、つ、る、よ、い、消、防、一、隊、の、御、と、勇、と、る、ぞ
よ、の、女、存、る、あ、ら、さ、る、よ、の、業、と、て、ん、も、亦、一、身、を、犠、牲、に
せ、る、可、ら、さ、る、こ、と、あ、り、隊、隊、最、後、一、甲、の、刃、余、
ら、と、同、し、く、煙、も、六、尺、消、防、の、司、命、さ、る、之、れ、を、握
つ、て、屋、上、に、立、つ、か、故、く、消、防、の、長、業、ハ、振、ふ、さ、る、幕、高
り、時、代、消、防、の、世、を、分、つ、て、此、長、波、者、精、を、附、け、る、
此、の、世、中、特、く、勇、敢、を、以、つ、る、者、は、さ、ら、に、多、く、世、に

着とあり 始末と云ふ公す 情婦美姫の事
 久しき事いふ 詩中 泛流を溯る事とある
 を以て見れば 浪華の 養母 娘の事とあるんが此の
 甲戌の歳ハ 山陽が 梨影を 愛とて 仰ぐ事
 山陽より 詩の撰者 若菜 就の外 未だ 心若 田の 為
 人を 詳かき せし 往々 好古 家 倭托の 事と 公
 リ人を 欺く ことあり こん 又 好古 家が 琴の 浦に 居
 事と あり 是 詩を 心と なる 事と あり 然れ ども
 倭托の 事と あり 思ふ 山陽の 壯年 時と 雖 頻
 り 此 後 の 情事 あり 一 遺事 と して 笑 資 供
 する 事 なる かな

一月廿二日記

余少穎為不於其正以詩人為佳、
 文政十七家絕句集者先為詩、為
 不其尋考、以實月夜之什而
 與論史若千首、皆豪宕怪奇
 為而獨擅進其詩云、欲知中
 魚無知力、半生徒喚詩人、為之
 十二首、最觀為之本領、至其者、如
 此家惠之、春不要余之、藝言之也

思ひ出

竹内栖鳳(談)
豊田豊(稿)

序詞

此處には稿者豊田豊氏の乞はれる儘に、私の生ひ立ちに背景する畫生活、私生活に就いての種々なプライベート・ドキュメントを披陳する事にしたい。それ等は殆んど嘗つて世に公開された事のない従つて世上の人達に取つては未知の智識に屬するものばかりである點に於いて、讀者の興味を濫りに退屈に誘ふ事はないであらうと私は信ずる。話題も秩序や理論に纏縛されることゝの妙い茶話式漫談でなければ、浮世紳紙の形式を帯びた一老人の懐舊の唄である其事に依つて、讀者を寛るがするに充分であらう。では一老畫人の浮世紳紙を順次にめぐり出して行く事にしよう。

◇最初の師土田英林

私の繪の師匠は、世間の常識では一般に幸野楳嶺翁のやうに扱つて居るやうであるけれど、私は其前に、三年ばかりの短かい経過ではあつたけれど、土田英林と言ふ師匠に就いて居るのである。英林先生へ弟子入りしたのは私の十五の年であつて、其時が私に取つて畫家生活に入る最初のキツカケ

であつた。

しかし私が最初の師として英林先生を選んだと言ふ事は、何も英林先生が當時の畫壇に於ける勢力家であつて、畫家としての私の將來を有利に導いて呉れるであらうと言ふやうな其様な計劃的な意思からでは決してなかつた。英林先生は寧ろ當時、明治初期の京都畫壇では、著名なレベルの畫家ではなく、一種の偏した存在であつた。と言ふのは先生は本畫——即ち普通の繪畫を描く事をせず、多く友禪の模様なぞを畫いて居たものであつて、純粹には繪畫だけで確實な存在を保つ事が出来なかつた程度の畫家であつた。

然し英林と言ふ人は非常に奇骨肌の脱俗的な所謂「變り者」として、畫家仲間や或る種の聲明を作用せしめて居り、其交際仲間も、當時の畫壇に於ける知名な人物に依つて構成され實際的には大家ではなかつたけれど、其生活環境には歴とした畫壇人としての雰囲気がかもつて居た。土田英林先生も亦

藝術家氣質に著しい生れながらの畫家であつたのだ。

其土田英林先生を私の畫道の師として選んだ理由は？

それは理由と言はれる程の具體的な動機に依つてなされたのではなく、英林先生に私の親の僅かな血統の繋がりのある便宜が、兩親達に其事を暗示させた結果からであつた。

『恒吉(私の本名)がえらい繪が好きやよつて、英林はんが心易いのはけ、埒が早いよつて、英林先生にでもお世話を頼もうやないか。』

恠う言ふ無造作な兩親の漠とした考案が、私を土田英林先生の弟子としての、畫家の卵としての生活の中へ投げ入れてしまつた。

それは料理屋であつたところの私の父が、其掌に扱ふ魚を、魚籠の中に投げ入れる其事と餘りに相違しない簡単な解決だつた。

◇楳嶺塾入塾當時

だが私が其土田英林先生に師事する期間は、三箇年に依つて結了された。

十八歳の時、私は正式に私の師となつた幸野楳嶺先生の門下として轉塾した。

私が言ふまでもなく幸野楳嶺翁は、明治初期より明治中期へかけての、京都畫壇の代表的人物であり權威的人物であつ

た。従つて全日本畫壇から言つても、有数の屈指的存在でなければならなかつた。楳嶺塾へ入塾當時の、私自身の映像が今私の記憶の鏡に反映される。それを私は其儘此處に復寫する事にしたい。

幸野楳嶺翁は四條丸山派の傳統を、明治時代に完成した藝術的功績のほかに、門下の養成、後進の養成と言ふ事に就いて、一大事業を遂げた人として、其人物的價値をより多く高めた人であつた。故谷口香矯、故菊池芳文、都路華香等の逸材を首め、其他不肖私の如きも楳嶺先生の教養に培はれた人間である。藝術家である以外に、先生はより多く教育家であつた。

京都府畫學校、青年繪畫研究會、京都美術協會等の當時の京都畫壇に於ける重大事業は先生の手に依つて營まれたものであつて、それ等は孰れも先生の傳記を華かに彩色するところのものでなければならぬ。けれどもそれ等の美術的事業以上に、先生が最も確實な成功を納めたと言はれて居るものは、幸野楳嶺私塾の經營であつた。

と言ふ以上其私塾の經營方式が、普通の寺小屋式な、或ひは道場式な畫塾のそれとは、別種の趣きを呈して居たであらう事は、人々の推測を容易にせしめるであらう。それは事實であつた。當時に於ける楳嶺畫塾の有様は、恰度今日の學校

のやうな組織立つた嚴正な規律下に布かれ、一見私學校のやうな觀を呈して居たのであつた。

其處へ私は入塾した。私と同年輩頃の者や、私より、以上の者等が大勢、先生の薫陶に養はれて居た。さうしてそれ等の總ての塾生達は、先生から先生が自ら筆にした描寫の手本を與へられて、其手本に依つての熱心な練習に依つて、其畫技の上達を計劃した。さうして彼等は其描寫した作品を先生に呈示して、叱正されたり、褒められたりして、畫學生らしい胸の波動を作つて居た。

ところが私はどうしたもののだらう。入塾以來先生は更に私に繪手本を授けて呉れないのであつた。私の記憶に依ると、入塾後半歳に至る長い期間に於いて、松竹梅三枚の手本を與へられた切りであつた。さうして先生はそれ以上に更に一枚の餘分すら、私のために手本を作り與へて呉れやうとしなかつた。私は不審を胸に作つた。又淋しさを經驗した。

『先生、私にも、もつと手本を描いて下さい。』

私は狐疑しながら言つた。

先生は微かな吐責を其眼に走らして、『お前は竹内流に描けば好いのだ。』

其事は一體先生が私の畫技を認めない結果からか、それとも手本の必要のない程度にまで私を認めて居て呉れるのか――

――私は模嶺先生が私が半年の間、松竹梅三枚以上の手本を與へやうとしなかつた眞意を、熱い感謝の心を以つて理解した。私のための此異數な拔擢は、先生から千枚の繪手本を與へられる其事よりも、よき修業であつた。私は模嶺先生をどれ程徳としたか知れない！

◇幸野家轉宅の日

私が二十ぐらゐの時の事である。私はまだ模嶺先生の塾に起居して居た。

其時に私が醸した『笑ひ』の記憶を讀者に傳へる事にしよう。

何んでも先生のお宅が間の町御池から室町六角へ宿替される事になつた。で、書生達はそれ／＼其力の分に應じて、引越の手傳ひに従つた。或者は引越車の後押しをしたり、或者は重量のあるものを兩腕に抱き取つたりして、仲々勇敢な引越人夫振りを示して活躍した。

だが私は料理屋の俵であるにも關はず、夥しく腕が利かなかつた。で、私は私の負擔の堪へ得る範圍で以つて、おまる（便器の京都の方言）と釜とを片々にぶら下げて、舊宅から新宅への持ち運びを試みたのであつた。

私は其時の私自身の姿を、胸裡の中に再びして見ると、其餘りにも無稽な姿に、私自身笑ひをミよめ得ないやうな氣

――惱ましい苦慮が時々私の胸を微かに嚙んだ。

けれども先生は骨法用筆――運筆の事に關しては、特に強度の熱心を以つて私を説いて呉れた。先生の私に對する教養方法は、私に取つて奇異な謎であつた。

それに入塾してから半年目、先生は忽然として私を他の同僚や先輩の同塾生達の上に拔擢して、私を塾の教師に任じて呉れた。今度は私は謎である事以上に奇蹟を感じた。

けれども兎に角、其以後私は入塾してから半年経たない身を以つて、他塾生達が描いて來る作品を、面はゆい心持ちを侵して、加筆したり、修正したりする事になつた。

然し其事が私の畫技の習熟のためには、どれ程よき結果をもたらしたか知れない。他人の作品をなほすと云ふ事は、自分自身で盡く事よりも、より以上懸命な態度を必要とする。制作者自身懸命の力を盡して描いたものをなほすと其事は、其作品をしてより以上に優れたものとして効果させるためであるから、濫りに粗慢な態度を以つて臨む事は絶対に許されない。其時の修正者の心持ちを言ふものは、裁きをする者のやうに神聖で嚴肅で緊張したものでなければならぬであらう。

さうした弛みのない心の持續は、私をして普通の制作以上に、私の技術の上達のために、敏速な効果を與へた。

がされる。書生の事であるから袴を丁寧にうがつて、いと莊重な姿をした私が、片手に尾籠な便器を手にし、片手に釜を抱へて、京都の都大路の土に書生下駄の響きをカラ／＼と弾ませながら、辿つて行く姿と言ふものは、如何なる漫畫の作者も筆を束ねて、其描法に行き詰つた事であらう。

それだけなら話は單純な微笑を以つて看過されるだらう。だが其様にして、世にも奇怪な姿をして、街路を辿つて居る時、私の反對の方からも奇妙な運搬者が、街上に於いて私と同一地點に行き交ふために辿つて來るのであつた。

相手は紺法被か何かを着た料理屋の丁稚らしく推測される十四五ぐらゐの出勤運びの少年であつた。彼は其天に向ふられた掌上に、掌の負擔に堪へない程度に、皿や鉢を幾枚も載せ運んで來るのであつた。讀者は今日でも彼の料理屋や、そば屋の男衆が、其功妙な運搬の手業に依つて、十數枚にも餘る食物の容器を運ぶ曲藝師のやうな技術を目堵されて感を催された經驗を持つて居られるであらう。

私の不態な不器用な運び振りに引き換へ、私と同じ運搬者の境遇を持つた街上の同僚は、其様な手練の運搬者であつたのだ。

私と彼とが交錯し合はなければならぬ描かれざる同一の横線點への、兩者の距離がまた／＼と間に近接した。さうして

二人は横線点だけでなく、縦線点も共に結合させたのであつた。二箇の年少な運搬者は都大路の一角に、X形に交錯して崩壊した。不注意に道を辿つて居た私は、遂に其料理屋の丁稚に衝突したのであつた。

衝突は又次の現象を起した。丁稚の掌上に均衡の按配に依つて、覺束ない存在を保ち得て居た皿や鉢物は、衝突の反動に依つて、安定の位置への凄まじい反抗を起した。皿と鉢は土の上に崩落して、熾んな壊滅の響きを立てた。

『しまったッ！』畏怖が私の心を打つた。私は此直後に起るであらう忌はしい事實を豫想して、三十六計逃ぐるに如かずの聰明な策を取つた。おまると釜を引つ抱へた儘、私は私の足に速力を注いだ。足は電氣をかけられた機械のやうに急調な速度を以つて、室町六角の榎嶺先生の新宅に向つて躍つて行つた。さうして私の胸の脇にはおまると釜が、拍車のやうに鳴り響りながら、提携者から遺棄去られる事を思つた。『膝栗毛』の挿繪畫家だけが恚う言ふ珍な姿を描き得るであらう。

新宅の臺所に釜とおまるとを投げ出して、臺所口にべたりと座り崩れた私は、風爐のやうに烈しい大らかな息を續けざまに放射した。

だが私の其瞬時の安堵の後には、再び苦痛が待ち受けて

て、其頃の南畫家と言ふものは、所謂文人墨客氣質其儘な非常に恬淡な、非常に洒脱な、儒者や僧侶などとは又違つた俗離れのした愉快な氣風を持つて居たものである。さうした南畫家に接すると、相當な大家であつても、餘り難しいオウクワアドな感じのしない親しい情を持たせられたものであ

る。詩人的——歸着するところ總ての

形容は此一語の中に盡きるのであらう。

其様な南畫家の性格のうちでも、殊に典型的だつたのは今の池田桂仙氏（稿者註、現京都南畫壇の代表的人物、自由畫壇及南畫院の重要な構成員の一人である。）の父君にあたる池田雲樵先生と重春堤先生であつた。此二大家は南畫の旺んな當時にあつて、南畫家仲間では、最も上位にある人であつた。

此二大家には私は、今の美術學校の前身である京都府畫家校の教室に於いて接觸する機會を持つた。當時畫學校は東西南北四宗に分劃され、何宗々々と呼んだものであつて、今から思へば随分クラシカルな感じのものである。

池田、重兩先生は其畫學校の教師として在勤して居られ、



試筆 中村岳 陵

居た。私の後を追跡して來て居た丁稚が、臺所の土間に入り込んで、怖れ氣もなく泣き放つて、私のためにもたらされた奇禍に就いて、綿々と苦情を縷述したのである。主人の家人は其憐れな境遇者に同情して幾らかの辨償の代を與へて、彼の哀訴を購つた。さうして私は其粗忽を家人から叱責される事に依つて、私の罪を償つた。其當時、榎嶺塾ばかりでなく、他塾にまで風評された私の最も有名な粗忽のエピソードである。

◇明治初期南畫の二大家

恚うした時期に於いて私が熟識なり面識の機を持つた當時の大家であり、今日美術史上の偉人となつて居る森寬齋、岸竹堂の二大家の印象記に就いては、稿者豊田氏が『文藝春秋』（昭和二年八月號）誌上に執筆掲載されたから、此處にはそれ以外の二三の大家に觸れる事にしたい。

其當時日本畫家は當時の歐化萬能の風潮を受けて、生活的に非常に壓迫され、内職に勞苦したり、洋畫の方に鞍替へをしたり、苦痛な經驗をしたものであるが、南畫家は政治家や上流階級の人達が維新の氣風の名残りで、志士氣質を以つて居たところから、其文人墨客的表現を愛されて、相當需用を持つて居た。

私は榎嶺先生の許から此處の生徒として通學して居た關係！此兩南畫家に親しく接觸する機會を幾度も得る事が出來たのであつた。

池田樵雲先生の色々の姿に於ける私の最も忘れ難いさうして微笑ましい記憶は左の一場景である。

其處は畫學校の一教室である。一人の大きな軀幹の好々爺の老體を取り巻いて元氣なさうして悪戯つ氣な二十未滿の畫學生達が蒼りに騒々しくして居る。

其生徒の一人が何か古畫の軸物を手にして居る。老人と生徒達の間には一個の卓子が挟まれてある。生徒は其軸物の卷を卓子の上にさし置いて、今徐ろにそれを展げやうとして居る。他の生徒達は、肉體の總てを興味と期待の感情に剛化させて、好奇の眸を現はれやうとするものへ準備して居る。

老人は其眼の縁に皺を寄せながら、生徒達の舉動を菩薩のやうな愛撫的な表情を以つて、見成つて居る。

『先生、僕は王石谷の素的な圖を持つて來ました。先生に見

て頂かうと思つて、此處へ持つて来て居るのです。何しろ王石谷ですからねえ、とても素的ですよ。偽物じゃないんですよ。本物、真蹟なんです。』

初め其生徒は恚う言つて、王石谷の畫軸を此教室に持ち込んで来たのである。其結果が今恚うして、小人数の人達に取圍まれて、其王石谷を、澤山の眸の放射の下に開卷しやうとする瞬間を成さしめたのであつた。其期待に光る澤山の眸のうち二つは私のものに屬して居た。私も王石谷檢分の一構成員だったのである。

生徒達が注意を強ひやうとして居る對照は池田樵雲先生であつた。開卷者の指が畫軸の端に緩やかな運動を行ひ初めた。と、無心に大きな眸を凝つて居た樵雲先生が、朗らかな邪氣のない聲で、感嘆を含ませて叫んだものである。『うまいもんじやなあ。王石谷はなる程うまいもんじやなあ。』



猫 (丁々會第一回展)

石谷の繪に對する興味よりも、樵雲先生のおかしさに轉換された。

『うまいもんじやなあ、うまいもんじやなあ。』
開披し盡されるまで、とほけたやうな顔面であつて、先生は恚う大きな聲に呟くのだった。

笑ひが私の胸元から咽喉へ目掛けて驅せあがらうとした。私はそれをグツと抑へつぶした。

——何んでもない事であるが、其處に樵雲先生の……當時の南畫家全般の洒落な、氣易い、愛嬌を帯びた風格を象徴的に感ずる事が出来る。どう言ふものか此時の先生の印象が、其後幾度ひか私の回想の中に甦つて来て、私の微笑みを咬るのであつた。

重春堤先生も亦面白い人だつた。

此人は座蒲團の上に座る時、恰度其眞上に體をあてがひ、妙しても其體がはみ出さないやうにする癖を持つた人であつたが、人間は實に禪味を帯びた洒脱な人だつた。

矢張り此人も畫學校での關係から、接觸の機會を造つたのであるが、忘れ難いのは初めて重先生との面接の際に於けるのであるが、遂に洋畫の開拓者として大名を残すに至つた。

洵に翁は京都——關西に於ける洋畫の元祖であり、創始者だつたのである。其點に於ける翁の功勞は歴史的であり、永久的である。我國開化史上、翁も亦一恩人として名を列ねる權利を持つてあらう。然し其洋畫技は何分初期の事であり、京都に於ける最初の試みであつただけに、恰度あの五姓田芳柳のやうな南畫畫臭い、今日から見れば甚しくアクの抜けのないものであつた。洋畫の方は其様に重苦しい寫實のものであつたが、日本畫の方は彼の大雅堂の描風を頭に呼び來る奔放稚拙の味を帯びた氣分的な畫をもした。殊に布袋の圖は翁の十八番とも言はれるものであつて、仲々妙味のある描き振りであつた。——さうした畫の好みから言つても翁の禪骨を帯びた磊落な風格を偲び知る事が出来るであらう。

宗立翁の人間印象も又忘れ難いものである。坊さんであつたせいも、非常に重々しい大きな圖體の人であつて、其聲の發音振りも、其大きな體格に相應しいやうに抑揚の頗る緩漫な重たさと嚴しさと同時に面白味を持つた語調であつた。

たとへば氣候の挨拶を陳じやうとする場合にあつても、『こ、こんにちば』と、緩かなテンボを以つて、強度の發音で先づ一語を區ぎり、『え、おてんき』と、又區ぎり、

先生は老眼で大きな眼鏡を其兩眼の上に架して居たが、私が、『私が竹内でございます。』
『自分が竹内を紹介すると、先生は暫らく其答を閉塞させた儘、眼鏡越しに眼を覗かし覗かし、顔をグイ／＼と私の方へ近づけながら、遂に——
『は、あ、あなたが竹内さんか!』

妙にアクセントを強めて、如何にも感嘆に耐えぬやうに言はれたものである。一介の畫學生に何をどう感心したのであるか。私は先生のむき出しな愛嬌のある態度に、グツと笑ひの發作を吹き出すところであつた。總てに重先生は恚うした微笑ましい習癖を持つた人であつた。

重春堤先生は、其南畫の技に於いて、米點法に非常に巧みな業を示したものであつた。『重の米點』と言へば、當時珍重もされ、喧ましく言はれたものである。

◇京都洋畫の開祖田村宗立

次は田村宗立翁の事に就いて傳へる事にしやう。
宗立翁は元來坊主の出て以つて畫家を業なまとするやうになつたものであるが、其頃にはまだ洋畫と言ふものがなかつたので、翁も又最初は日本畫家——南畫家として一家をなした

「ですなあ」と、漸くにして結末に迫り着くと言つた調子であつた。それが相手へ言ひやうもないユーモアの快味を微笑ましく與へるのであつた。

兎に角翁も又習癖の色彩の強烈な人だつた。

◇久保田米僊先生の追憶

久保田米僊先生は私の師幸野榊嶺先生と兄弟のやうな親密の度に繋がれて居た人であつた。けに、私も單に面識を持つて居ると言ふ以上に、より内部的な深さの交渉を持つて居た。

久保田米僊先生は今日では餘り重大視されない傾きがあり其點先生は其實價から比較して恵まれない人であるが、然し私達は翁の残した功績と言ふものに就いて、正當な評價を與へねばならないであらう。

米僊先生の京都畫壇——美術界への遺産は、何よりも其有職故實に就いての具さな研究を遂げ、有職故實の知識を、斯界に普及しやうとして誠意を盡された事である。

其頃の日本畫家には歴史畫を畫く場合、神功皇后の御衣裳に平氣で緋緘の鎧を被せて、些の撞着も感じずに居ると言ふやうな無頓着な人間が少なくなつた。米僊先生は日本畫家のさうした有職故實に對する無智識を尠からず不滿に思つて、それ等の欠陥を全然廢滅させやうと言ふ意思を以つて、種々有職故實に關する研究なり、提唱をしたうちでも『繪島の霞』數を算へたけれど、日本畫家で洋行する者と言つては絶無であつた。それを米僊先生が率先して其記録を破られたのであるから、如何に米僊先生が當時に於ける新時代であつたかを知り得るであらう。

米僊先生の洋行の事から、私自身への我田引水に轉する事になるが、米僊先生に亞いで京都の日本畫家で洋行した者は此私であつた。私の洋行したのは私の三十八の年で、洋行前私は西洋の美術に就いての智識と言つては、恥を裝はずに言へば、せいふラファエルとミケランゼロの名前を知識して居るぐらゐの事であつた。それは當時、美術界に於ける熾烈な邦畫復興運動や其他當時の國粹風潮に結果されて、西歐美術に對する一瞥を潔しとしなかつたそれ等の理由から、總べての日本畫家がさうした状態にあつた罪であらう。

で、いざ洋行の遠路に上らうとするに臨んで、これでは折角の洋行を價値薄いものにしてしまふであらう事を恐れた私は、東京へ出掛けて行つて、明治美術の指導者であつた故岡倉覺三氏とフェノロサの兩先輩に就いて、東京美術學校に所藏される泰西名畫の複製の一通りを説明解説して貰ひ、西洋美術に就いての概略の知識を得たのであつた。

其急製の西洋美術のアウトラインを渡航券と共に確り握りしめて、私は私の體を大洋の波へ托した。漫遊一年間、私の

一卷の著作は、實に斯界への好刺戟であつた『繪島の霞』一卷はさうした有職故實に關する精細な智識を述べたものであつて、我々はそれに依つて米僊先生の有職故實に對する深い造詣の跡を窺ふ事が出来たのであつた。又人及時代のそれらに依つて、故實を瞭かにした其組織立つた釋述は、確かに當時の其道の人達を覺醒さし、裨益さすところのものであつた。

さうした米僊先生の熱心な有職故實の提唱の結果は、當時の杜撰な有職故實に對する日本畫家の頭を組み替へる事に役立ち、今日では最早神功皇后に緋緘の鎧を被せて平氣で居られるやうな愚かな頭腦は跡を絶つたやうである。偏へに米僊先生の貢獻に貢ふところである。

又近江の瀬田の唐橋から河上への空間に、自分の禪を外して翻翻と垂下させ、其美觀（寧ろ奇觀の方に近いだらう）を泌々と享樂したと言ふ奇行を、私達の記憶に残し傳へて居るのも、確か好漢久保田米僊先生である。

更に米僊先生の事跡に就いて逸してはならない事は、先生が京都の日本畫家中で、先頭第一番に洋行した記録の保持者である事である。恐らく私の記憶にして誤りなければ、獨り京都のみでなく、全國を通じて米僊先生は日本畫家洋行の先驅者であつたと思はれる。當時洋畫家で洋行する者は多少の體は又日本の土へ運ばれて來た。

◇岡倉覺三氏との因縁話

岡倉覺三氏と私の間には、左のやうな奇しき因縁がある。それは唯單に私と故岡倉氏とのエピソードである以上に、私の運命に急角なカーヴを劃さうとまでした私の生涯に取つてのロマンチックな運命物語であつたと言つても、言はれない事のない事件であつた。其時の私の處置が、其時私が執つた他のものであつたならば、竹内栖鳳と言ふ人間の運命は著しく違つた方向の姿を見せて居るに違ひない。

それは私の記憶にして誤りなければ、内國勸業博覽會が開催された翌年、私が京都の美術工藝學校の教授として任命を見た其年であつたから、確か明治二十四年の事に屬する。

自分の事に就いて自己紹介するのも變な感じのものであるが、其頃の私は最う三十幾歳の既に妻と二人の子を設け家庭人としても相當な資格を備へて居た譯であるが、社會人としても相當畫壇に於ける有利な位置を占めて居た。

一方岡倉覺三氏は其頃東京にあつて、フェノロサ、橋本雅邦、狩野芳崖等と去就を共にした邦畫復興運動、國粹美術の提唱者、改革者として雄飛し、美術界に大勢力を張つて居た。自らは描く事なく、明治美術界に於ける批評家として、指導者として、實際運動者としての天心岡倉覺三氏の足跡は、雅

邦、芳崖の大畫業と共に史上に印する精神的建設でなければならぬであらう。

當時岡倉天心は横山大觀、下村觀山、小堀鞆音、菱田春草、川合玉堂、寺崎廣業等の東都の畫壇の寵兒を其傘下に集めて繪畫協會を經營し、兼ねて東京美術學校を執掌して居た。氏等の起した邦畫復興運動は旭日の高昇するやうな華かな進行を展開し、洵に岡倉氏の聲望、力は飛ぶ鳥も容易く落す事が出来るであらうと思はれた程であつた。

斯る時、岡倉氏は京都へ來た。それは何か漫然とした周遊の旅のやうなものであつたらしく、氏は前記の諸畫家は伴つて居なかつたけれど、多分美術學校の關係者——恐らくは理事か教師のやうな人達であつたであらう——を十數人ばかり引率して、旅館終屋を宿泊の場所に選んだ。

其終屋にある岡倉氏の許から、私に向けて急信が射られた。私は心に何らの用意も構へず、恐らくは旅途の話相手に招かれるのであらう程度の漠とした心の象で、終屋の客を訪なふたのである。

其處は廣潤とした座敷であつた。岡倉天心を中心として、同伴の人々は居座を崩して、酒宴をたけなはにして居た。發散したアルコールが部屋の空氣を生暖く擾亂して居た。座中の人々の顔の皮膚は酔氣のために毛穴を擴大させて、筋肉を偉くても矢張り蛙で終るだらう。然し男子は大海に出なければ嘘だ。竹内君、今美術家の大海は東京だ。今僕等の國粹運動は非常な成功に向つて居る。日本畫の今後の運命と言ふものは、實に計る事の出来ない盛大さが豫想される。之から色々な社會的な日本の大事業が、東京の美術界を中心として生れて來るだらう。政府を根據にした日本の綜合展覽會が實現されるかも知れない。其時、京都のやうな偏在した土地に居たのでは、其盛大な運動の圏外に置かれる憂ひがある。竹内君、今君の腕を充分伸べる土地は東京の天地だ。東京には大觀も居る、觀山も居る、春草も居る、廣業も居る。僕等の繪畫協會がある。勿論君が東京に來るからには、君も繪畫協會の一員に参加して貰ふ。さうして直ぐに東京美術學校の助教に任命しやう。竹内君、機會は其瞬間に掴まなければ嘘だ。直ちに決断したまへ。それが君のための善處だ。」

岡倉氏は優れた實際運動家に有り勝ちな煽動的な巧みな熱辯を以つて、私の心の中へ熾烈な斬れ味を以つて切り込んで來た。私の心は手應へを効果した。

「東京行！」私の心は悠々答案を書くための手を出して居た。

「岡倉さん、有難うございます。萬一東京へ赴くやうな事になれば、どうぞ宜しくお願ひ申します。」

「竹内君、萬一は廢さう。僕はもつと確乎とした意思で言つ

ゆるめて居た。さうして彼等は紅茸のやうに赤くなつて居た。雖然とした騷擾が彼等を支配して居た。だが酒中の彼等は明治二三十年頃の壯者として、多分に豪放な磊落な態度を持つて居た。殊に岡倉天心はさうした革命的な人物であるだけに、豪快爛漫な人間の魅力を以つて私を打つた。

「えらいところへ來合せたな。其座敷に這入つた瞬間に私は心に苦笑した。」

「お、竹内君か、よく來て呉れた！」岡倉氏は私の姿を認めた刹那に、卒直な喜悅の情を示して、快活に私を迎へて呉れた。

「まあ一杯行かう。」

強要的な盃が岡倉氏から私に渡つた。

「實は君さ大いに談じたいと思つて、來て貰つたのだ。なあ、竹内君、君一つ東京の人にならないか？」

意表な襲撃が岡倉氏の唇から走つて出た。然し岡倉氏の双眸がキラリと嚴肅な光に閃いた。

「え？」私は私の表情の總べてを以つて「？」を示した。

「なる程。岡倉氏の言葉と態度は鮮明なシンセリチイを示して來た。君は此儘京都に凝乎して居れば、君の今日の位置と聲明を以つてしたならば、或ひは此地の大勢力者になるかも知れない。然し京都も少し大きい井戸に過ぎない。君が幾らて居るのだ、直ぐに行くのだ。直ぐが好い。僕は無理にも之から君を引つ張つて、此儘東京へ歸らうと思ふのだ。僕達は之から木曾路の方を遍歴して、東京に歸る手順になつて居るのだ。で、君も此儘今夜此處にとまつて、一緒に揃つて行く事にしてはさうだ？」

恐らくそれには酒が作用する氣短かさや感情の誇張が多少はあつたのであらうが、岡倉氏の意思には、私を此處から一旦歸らしては、掌の把握から魚を水中に滑らすやうな不安が潜んで居るのであらう事を私は微かに看取した。熱情が岡倉氏の眼と筋肉の上に跳躍した。

私は其熱情の驚擲みに危く引き摺り込まれて行かうとした。然し私の心は其處まで感激的に躍らなかつた。家の者、周圍の者達にも其處置を計つて行ふ事にした。

「有難うございます。然し一度立ち歸つて家の者等とも相談しまして……」

「竹内君、それを言つて居るは可けない。妻子は君が東京に來てから、後か、呼びよせる事にすれば解決がつく。今君が有難うをいひ居ては機會は逃けてしまふ。直ぐだ。直ぐが好い。」

然し結局私は兎に角一應の猶豫を乞ふて家に歸つた。

(五一頁よりつづく)

そして結果は岡倉氏の言つたやうに機會は、掌を滑り落ちた魚のやうに、永久に「時」の中へ失はれてしまつた。家庭の事情環境の事情は遂に私の東京行きを遮つてしまつた。

私の回顧は深い感慨の上に浮く。あの時、若し岡倉氏の言葉に従順であつたならば、私の今日の運命の構造は、終屋の會見を境界として、全然他の違つた形態をなして居たであらう。其事は將に決行されやうとして居たのである。

洵に運命の方向と、そのは絹糸のやうな細さに、微かな联接を保つて居るのだ。

○此頃二通るばかり日課として隨筆の稿を修め
 る。往年の辛辛と書いば百道采を収めんとし
 およそ書きあがりし率上漫語といふは瑣語
 を百枚はかり書きつけし。辛辛の既三寸版
 の原々を達してある。まじし書直して納むるに
 七のが少くしもあるゆゑなる。そはや一冊とす
 十分の材料がある。唯此のつらさを要す
 のに梅排のようしきを得る。梅排の
 都合で除かぬはるるぬまの新加を要する
 七ある。ゆり又辛辛と脱行してはるるぬまは
 篇の目ばりいふを要する。二月四日記
 の不用の二枚の扉凡一紙を張る等へて○は双

有り合はせの切を法込んば、恰び毛を成かす
 て法込中、頼んで置いば切が七八枚に
 たり、毛を採り用し、あまのあし、うい、あ
 つた、其目左の如し

皇太后も毛織 複製

松井

雪櫃 扇面

茶室台

敬守

敷子 毛織

也 軒扇面

白糸 口上

吉道 履冊 四枚

雨衣 畫

雪入 口上

白佛 短冊

八刺印 口上

五峰 扇面

如也 口上

日

北窓 色紙書

御石堂書

秋月程村

梧井

寶舟画

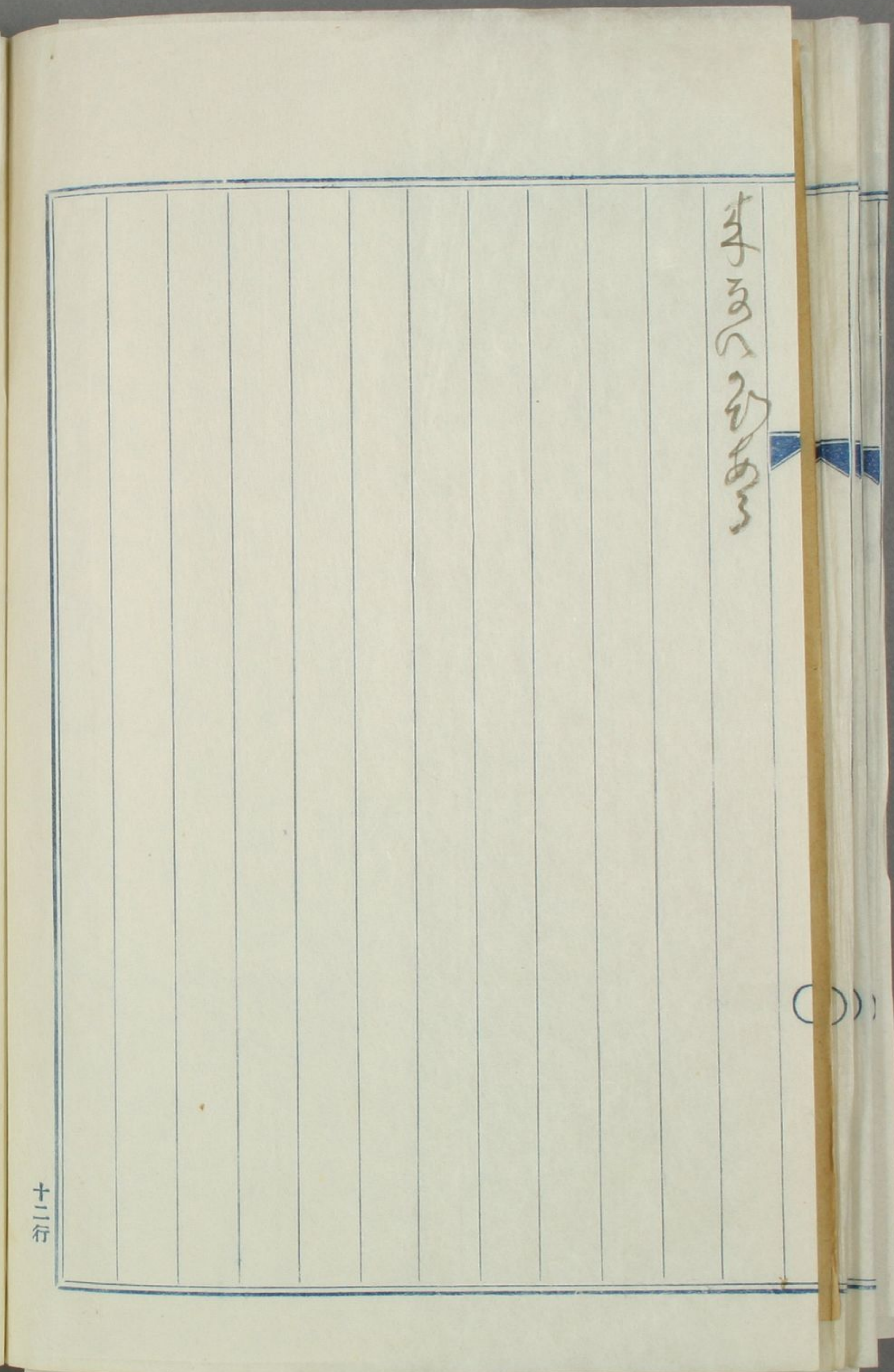
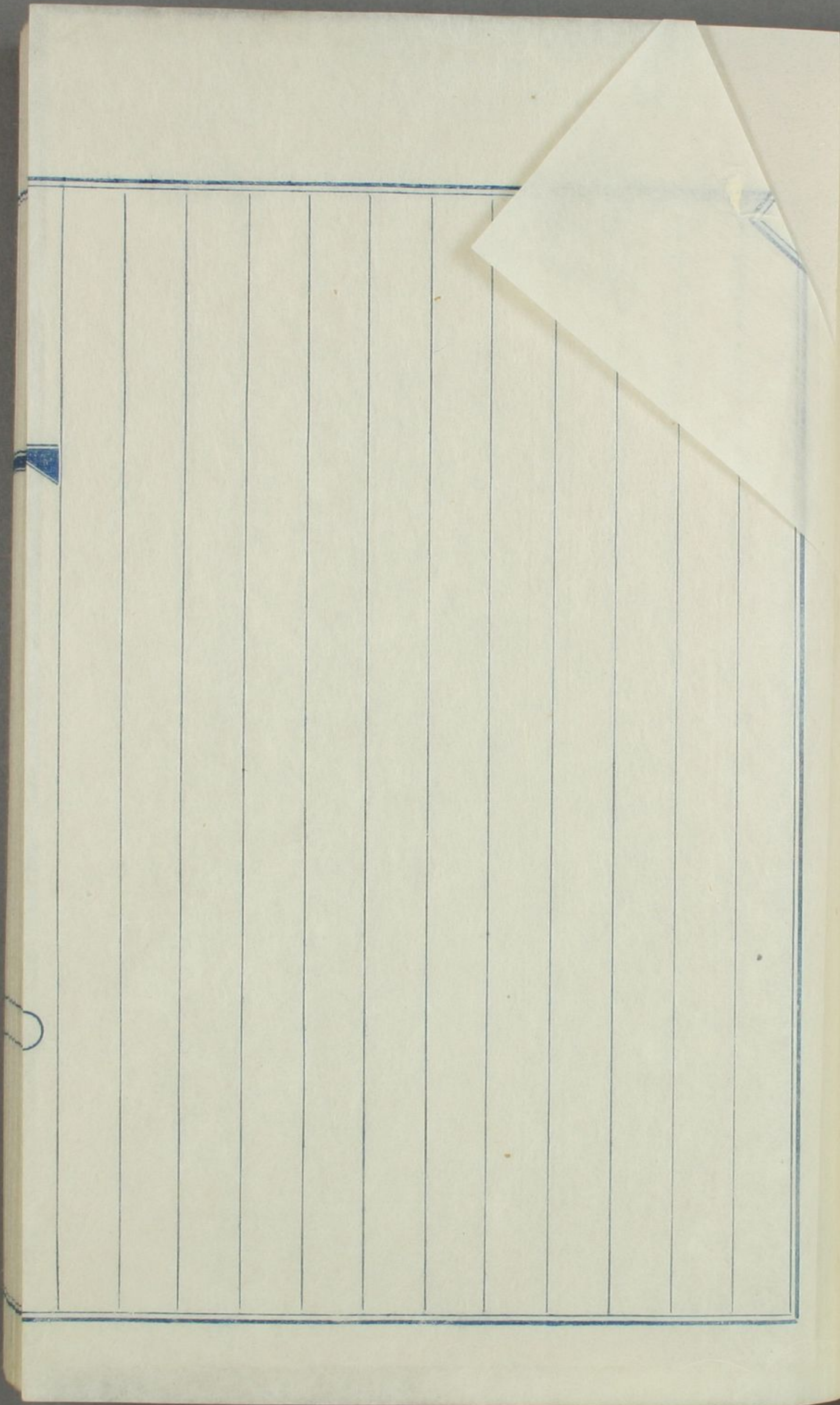
國乐的樂天

臨安画

他の半渡りたる雪様墨裁の絹本十八枚を残り
首尾二枚本の題器と引とを収めて保存の
たよりの中書也

○邦人の因縁に堪へ何とも氣のつらぬ事をも
人が見えて異校の感ずることのいふくある中なる女子
の年輩の一例として挿花を教へることをもハ外人から
入ると異校の感じがあらるといふの四角も外四心
ハ無邪心と草花を花名に挿又まゝに満ちしつゝ

る習俗からすると、特に花を挿む法を教へると云
ふことハぬと思へんことハあるが、日本も茶儀に
随伴しん挿花の法式がある、其の法式はいろいろの
流派にある位だ、花のえんせも種々のエ風があ
つて、或は常盤木を挿し、多々枯木をあしらつ
たりするもの、外四心を例の無いことハ異校
の思ふ古無記をみる、序に記す、昔ハ更那や
日本ハ浮山、あり、二氣上より可らざる材料と
ちつとあるが、外四心をあつたりする、珠としかつて
すゝもあつて細い短針を針に枝へてをねんかみ
ことあつてもある、全体ハ、遠土にさけるハ、首尾の
ところから、花葉のえんせハ、幾人とも見ることハ出



本日の出来事

十二行

圖書館協會主催第二十一回全國圖書館大會に於て

心事業トシテ全國道府縣市町村ニ圖書館ノ普及充
田局ニ於テ特ニ適當ナル方法ヲ講ゼラレンコトヲ
が決議されました。就きましては、此大會の決

でありますから、國民は協力して既設圖書館の改造、擴張等の整備は勿論、
たいものであります。新設さるべき圖書館は三種に分たれますが、先づ
すと、これは本來市町村立圖書館と少しく異り、多少参考圖書館たること
又これは府縣に於ける中央圖書館たるもので、府縣内大小圖書館の中心と
付つて居ります。所が我國全府縣の約半數はこの中樞圖書館を持たないので
ことで、此際未設置の府縣には是非共府縣立圖書館の設立を期したのであ

て次第
御大曲
改正を
性を認
以上
てある
これの
右の
學校
及び
設
圖書
に
教
養
に
加
十
田

過般 日本圖書館協會主催第二十一回全國圖書館大會に於て
「御即位大禮ノ記念事業トシテ全國道府縣市町村ニ圖書館ノ普及充
實ヲ期スルタメ當局ニ於テ特ニ適當ナル方法ヲ講ゼラレンコトヲ
望ム。」と云ふことが決議されました。就きましては、此大會の決
議並に本協會年來の主張に御賛同の上、御大典記念事業として特
に圖書館の新設又は改善に就き御考慮下され度、尙詳細は別紙意
見書御一讀を願ひます。

昭和三年一月 日

日本圖書館協會 理事長 今 井 貫 一

殿

御大禮記念事業として圖書館の設立及び充實に關する意見

今上陛下御即位大禮を愈今秋行はせらるゝに當り、國民は衷心より此御盛典を壽ぎ奉るゝ共に其赤心を象徴して、永久にこれを記念せむと云ふ力強き要求を持つて居ります。皇室に對する國民の敬愛の念が、畏多いこと乍ら宛然肉身的のものである事實は、異國人等の等しく驚嘆する所でありましたが、更に其驚きを深めるであらうものは、皇室に對する敬愛が取りも直さず同胞に對する親愛であると云ふことであります。即ち國民は皇室に對する敬愛を、公共事業によつて象徴せむと努めるのです。しかして

此記念事業には種々あると思ひますが、**圖書館の設立及び改善**は其中で最も有意義、有効の事業たることを確信いたします。申す迄もなく一個人より國家、人類の大に至る迄、其盛衰は新鮮にして健全なる知識の量の多寡と、其實現力の強弱によるのであります。此知識の普及と實現力の増大とは圖書により、更に圖書館によつて十分に圖り得るのであります。即ち

圖書館は學校と相俟つて、國民の精神及び物質生活の向上に資する所の原理なり、實際的指針なり、娛樂なりの潤澤なる供給を其機能として居ります。で、かゝる重要な機關である所から、近來頻りに其必要を痛感されて來たのであります。圖書館の新設と改善が御大典記念事業として最適であること信ずる理由は、實にこゝにあるのであります。こゝに現在に於ける

全國圖書館の狀況を一瞥いたしますと、量質双方に於て遺憾乍ら尙ほ甚だ不充分であります。館内設備の不完全は云ふに及ばず、藏書數の點でも外國には百萬冊以上の藏書を有する大圖書館が數多あるに、我國には未だ一館もなく、一萬冊以上を有する館は百内外、三千冊以上を有するものでさへ一千に充たぬ有様であります。更に館數に就て見ますと、これ又甚だ心細いもので、大正十五年四月現在に於て四千七百二十一館でありまして、全國市町村に各一個の圖書館を必要とせば、其最少限度たる一萬二千館に達するには前途甚だ遼遠の感がある次第であります。かゝる現状は、一層に圖書館の新設と改善を御大典記念事

業に好適のものとして居る次第でありますから、國民は協力して既設圖書館の改造、擴張等の整備は勿論、大小圖書館の新設を計畫いたしたいものであります。新設さるべき圖書館は三種に分たれますが、先づ府縣立圖書館に就いて申しますと、これは本來市町村立圖書館と少しく異り、多少參考圖書館たることを其機能といたして居ります。又これは府縣に於ける中央圖書館たるもので、府縣内大小圖書館の中心となり、指導者たるべき任務を持つて居ります。所が我國全府縣の約半數はこの中樞圖書館を持たないのであります。これは全く心細いことで、此際未設置の府縣には是非共府縣立圖書館の設立を期したいのであります。

市町村立圖書館は前者と異り、市町村民の生活に、より緊密に接觸して居りまして、市町村民に一般的教養と娛樂とを供給するのであります。今日では我國に於ても、小村落に至る迄圖書館の必要を叫ぶ有様になりましたが、其現狀は外國に於ける小町村圖書館の整備せる建物、又それ等圖書館の張れる充分なる圖書館網に、到底及ぶべくもないのであります。市町村民の智的、道德的向上のため、市町村圖書館の新設及び改善を主張する所以であります。又

學校圖書館は、單に學校の從屬物でなく、教室で教へられた原理を應用し、理解する研究室である故、これの有無良否は學校の價値を左右いたします。これの新設、擴張、整備も、御大典記念事業として好適であることを確信する次第であります。

以上の如く圖書館界の現狀は未だに不振ではありまするが、政府に於ても民間に於ても、等しく其重要性を確認せられて第五十三議會では圖書館普及に關する建議案の採擇を見、文部當局に於ても早晚圖書館令改正を行ふやうな趨勢を示して居らるゝのであります。これらのことに鑑み、

御大典記念事業は圖書館の新設及び改善を最適のものとするのでありまして、是非共これの實現を期する次第であります。

○此類の書格の多終る時は偶に四時格の
分しては念空の題の置欄二架四時格の
心法又の二の出来よりき元教宗存教次
の書つてし一 架の二の案の書格を
ハ物に不為此列のたれ心りなるよの
書格を元りけり置きたるなる教十並と
此列す此不為に就ていおぬは旋中
に置きし一 架の二の案の書格を
骨と重のたれあり或ハ一 架の二の案の書格を
ハ物に不為此列のたれ心りなるよの
をを置印しおぬは旋中
とと元除き置き置本洋を置本洋也物

語のたれちあり、頗る能に二のよありとも
いさう、多くいさうのたれ味もたれ
ますともあり、中：此物たれあり
ハ物に不為此列のたれ心りなるよの
置印しおぬは旋中
とと元除き置き置本洋を置本洋也物

置印しおぬは旋中
とと元除き置き置本洋を置本洋也物

から莫々の比とあるをゆえに小島の註教を於る
其教を併しくして紀念せんかとも思ふ十
教の註教を元除かゆい故なる日教
と得人

○高田貞教も堀内も(是)の古日信を漫道
式に畫し字を弄さる。由縁をいへば(是)の
白髯其かゝる(是)實物ともいへば(是)是
貞教の流も容れむ漢とある

吾か豆其流とおもへど

可也其まの節

柳又

の今(注)に(一)も出(米)口(老)の流(真)の(一)比(日本)性

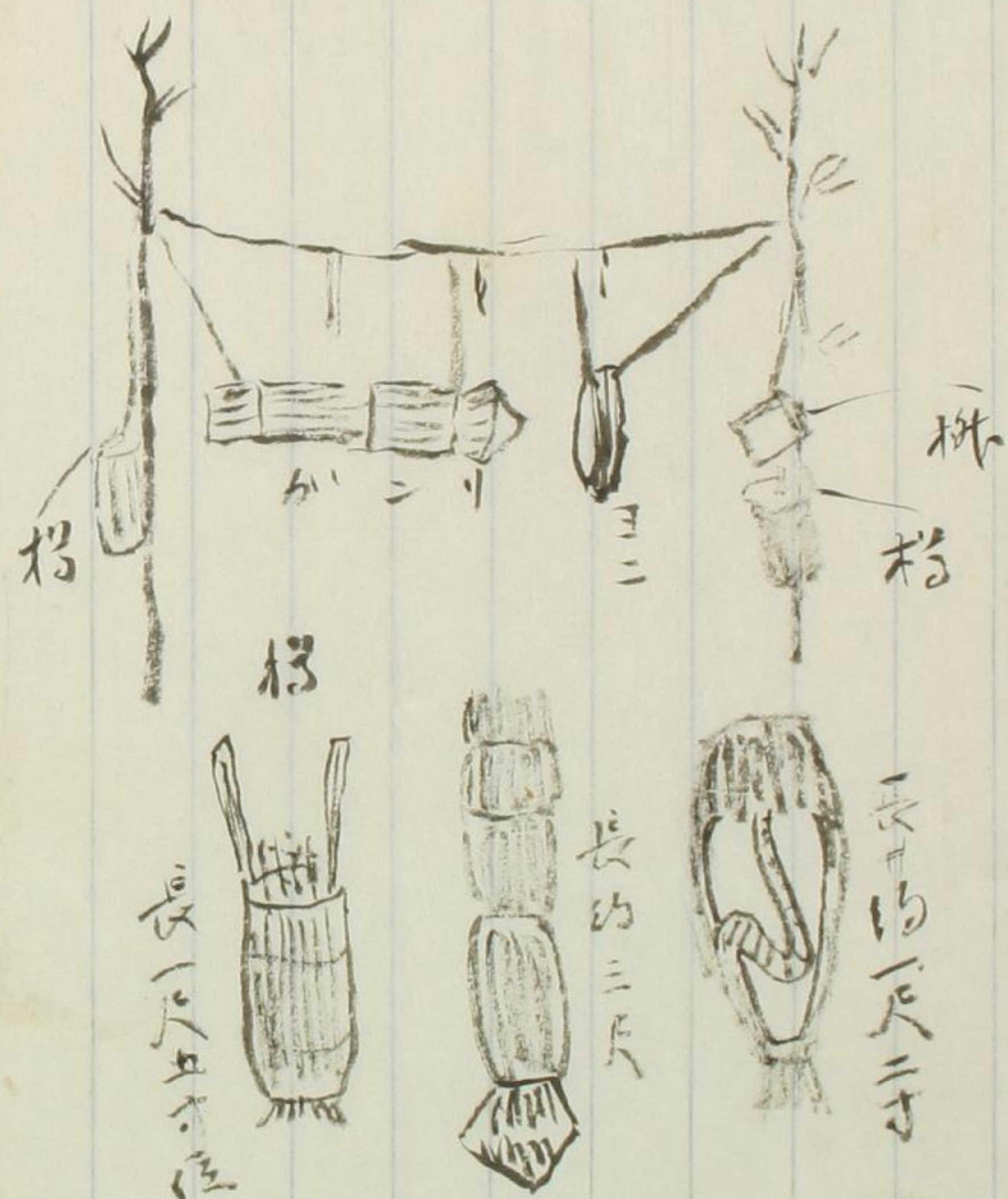
宗新資料一説を定むる事ある三(る)部(路)り
の非(書)を(其)る(と)いふ。其(成)み(行)方(郡)大(和)
村(字)花(川)の(部)に(郡)船(神)社(十)八(バ)ナ(ガ)シ(の)
神(古)事(一)記(左)の(記)る(事)あり

毎年五月田植を終り以後に此地をわし
離れ比神田に十八(バ)ナ(ガ)シ(と)いふ(事)を(之)
て(る)こ(ん)を(村)に(ま)て(る)の(事)も(年)々(も)て(り)
ま(て)る(と)ウ(ケ)ナ(が)付(いて)取(獲)か(よ)る(と)い(ふ)と(云)
ふ。村中(に)之(を)信(ず)ら(ば)屋(敷)家(とも)か(く)
て(ま)る(の)心(あ)る(が)此(村)に(え)来(二)坪(こ)も(れ)し
みる(の)む(上)か(二)敷(下)か(二)軒(一)中(尾)と(い)ふ。
其(家)に(心)の(ま)る(家)に(附)と(い)ふ(事)も(あ)る。是(し)

其家の人が他の家の家々行つた坊々必す
別火する。南庵を定めるのは十二月二十ある
さかしく十一月一日に決定する。其時に淨
神社に存する儀式が行れる。而して此
行するに要する一切の費用は神田からの上り
よりひき算する。さて人愈々其月ころより件
のナハバナガレをば神田の己さの道
る橋のしりしをこまてる。先づ二本の竹を
こまて(其間約二間)右方へ菅束火をの酒
指をさげる。其中の杉の葉と柿の葉を
かさす。向つて石の作る菅束火の株を
さげ、右方の竹のしりしをこまて、左の

方より菅束火のヨニをさげ、左の方より同じ
く菅束火のリンガをさげる。ヨニの内の儀
を曲げし入るリンガには箱の根こまて
七まんを付けし陰もこまて。此の形を
せし動き、凡の吹くやまんと橋の葉を人
々の之を御禮の坊の面をまわすのれ
と云つて是を斬くしをさくまて、
云々(土の身向き)

十ハバガシの図



のおぼろのつきのちのたきもね又のまの河世をいれん
 と形はつのか、らん(と)まんを注し直をしにともまの
 つに少の生前松に行はまのたことともま、祝友我
 わりまも路り注し直まもまの任てをあるは注
 日もうかうおうく、まのまの口を山名も波か
 あまといふこのかあま、ふ或のこの河世一と境
 が同じいとまのま、うらまのこもるを名乗るを
 本けるこのも出、まのめも動機も山名が
 自から名乗るを得ることか起つるとま
 りに或る或物の海名も自向に及んれとま
 津とまけのまの南向からせる、動機も山名
 公の波の誰のを知ることともま、協又波を振協を

して此説を考きお伽よと承り比関係もあつたといふ
大橋といはれかゝる交りもあつたといふ。此の頃の
量出殿の史料として小波の心を感ず此の集
こぬものごとを小波が流したところといふことから
梅の巻が起り、小波も由縁をいふから金を
梅の巻に入んせやうと海人だその版金せよ大
橋の内幕を公す。此のころ、即ち小波自白の動
機が、人の秘伝を暴露せんとて自家の秘伝を
暴露せんとすといふのである。自家の秘伝も物と大
橋と係るものなり。秘伝はしつゝ、金庫の
秘伝を自白するといふのは、いふ所から、行きてい
ハハハといふと思つても、さういふ所からいふんか

平を欠くと良心の咎めれぬ。小波が山
吹寺といふ金庫も夜叉のまねと題する一巻に徹頭
徹尾自家の秘伝をあらわす。更に、かくいふの
敗物傳がある。小波のうらやま、年時代から考へて
少めかあつたといふ。或る年、年集に入つて、婦人
へんとして敗れた。六日後、お波の経巻と考へ
る。敗れた原因は、文人生活の悲しさ、徹力
であることが禍をいふ。即ち此二人の間に金
力がある。人に奪ひ去らんといふのである。お波の
心筋が、小波の失敗を支へて憤慨して、こゝに
筆を執りて、お波の心があつたといふのである。か
論より、

の脚書と又しありて小波の経歴と曰ふこと
ハ勿論也が大徳の節を小波から取つたことハ好
まが小波に傳つたとそののい疑ふべくもあらぬが
小波が其の年よりうらむ自家の志物修うを
残す限るまで著作して其物とらするもつて
ハ豈にぬきぬきのいふの人の没名の姓を帝
諡とある大徳に就して憤然とあることと志
九を其のくが考ふるは自家の秘本を張るゝ志
向するとありてハ得て其相傳いする感がある
あがし其也を讀んて其も亦く興味がある
讀るが小波の口傳しと何事部も遺蹟いん
やんハ小波が又つた金を元り返すか知ぬぬ

近頃の復讐法は形うけしうてハ新と
しからぬれりも知ぬぬが小波ハそうも墮
比とも思へるぬ
二月八日記

永井為瓜が往年父の末原(又平)の色は
あしと小波も公刊し比ことかあるいくら
材料に小波に比からとまわす父の周遊用
話も其の存するもの(執事)を返してあ
る話の存するもの(執事)といふ脚本を
已名在尾に讀んでいんとして又其の
の會長次男格の内ハ比時の市井の末原
の弟坂本鈴し助いあつたか(彼等の序上
書り邊に比とといひ出して、あんなことを

将に将を人に馬上の人にあはせり。刀を長か
らきを得てぬ。書きよの重いか常の
行くちけんはらうぬ。紐きり折れやす
い。銀鍊甲しきも得て折れきりよあひ
けり。はらうぬ。さう上によき。おひ
上るひあはる。おひと許す。

書書。目録。書。信の執味の角。大志
ハ。皆さ。の。折。ひ。あ。は。る。自。分。か。の。刀。劍。こ。の。つ
外。彈。も。あ。は。る。けん。も。伯。の。説。ま。う。う。ま
の。か。ん。る。伯。の。説。ま。う。う。ま。の。刀。劍
鑑。家。あ。は。る。う。

浪人時代。高杉晋介。う。佩。刀。を。も。つ。

えん。た。ま。も。い。早。く。から。伯。と。鑑。家。か。の
あ。つ。は。一。例。ひ。あ。は。る。の。流。天。皇。ま。う。う。ま
変。改。の。名。刀。を。執。し。二。振。り。清。考。同。と
ま。つ。は。

一 岩島。孫。の。ゆ。を。川。執。味。の。圍。氣。三。引
入。ん。と。し。て。亦。も。多。多。情。の。刀。を。與。つ。と。は
こと

一 伯。の。國。者。も。執。味。か。あ。う。一。時。貴。重。の
者。を。多。く。持。く。ん。は。早。稲。田。大。の。あ。う。ま
か。ら。ん。は。六。羽。字。を。礼。記。義。疏。や。玉
の。扇。や。古。文。者。ま。う。う。ま。の。皆。國。寶。と。値
す。ま。う。う。ま。の。あ。は。る。

一 嘗てハ内府の古書を取調りて其の後
後を採らん古書故書といふ古物を
十冊給出さんにことある

一 往卷七一時多く集めんは岩淵の別荘
七示さんにもよる二十枚書とあるは
皆稀観のものか天平以前のものか
珍らしい漢語のあるもの多くあつた
一 伯の骨董もの趣味はあつたその中に
くまのうしよの皆元元の漢書とあ
るもの金銀のもの人が送るものは
ハ價を論せず癖いんと見ゆる
一 正倉院の御物を販り出すことを許

志郎の古物もある、御物の金銀が東
瀛珠光の名に公刊さん比のいんか如
めこいある

一 伯ハ亦和歌と書し書を誦し古も
漢語と連してなす、さうさく通
ぬび歌方を傳へるも草紙さんか
此が出来て一人の定りする時の書信の
に於てやま。

一 私に書やさん比和歌を自ら草紙私か
早稲田の圖書館を信退し比の
一 本ことを聴かんとはむある
かまんが自らむあるのは異教と

すまじことか出来すまじ

一 向の建築は危なる妙寺の致味が
あり亦巧者かある當つて本邸を
菩提庵の口長を如の、東海道の
岩洲并に蒲原の別荘に大ま
に築かあり、其の作危々天下有数の
名園である

一 小石川の畔にありし菩提庵の舊址
ハ外部より危なるか院に得るから難
七折つてあるありし、後林修竹幽雅
の故が澄んで名所の一と数くんとある
邸もハ話のほどと也興ハか神殿と

一 此れをえに壯大のものである

一 岩洲の別荘に山を背よりて邸も
も築ききき危々千坪の大地區を
危園と一果柑園と一せんが中士
川に近路にあり、果柑園栽培の
為りより、危々の人家もあつて、宛然と天
部露の観がある

一 山を越えてみれば、その前が向の
書斎の前、後ろてはこまうつまき
草の危の一隅の回廊あるを、其
に流れて後ろに流るが、巧み
折木かあり、そのみ、樹材大

とて外郡とて何と云ふ家ひ置放
つやうあるつらめを是に入つて見ると
先から仙境に遊ぶの故があつて此處
の秘術が其とてある。日外面目と
其内容豊富に是に伯の面目が
見える

此のあり一方玄關から通用のま
約半所むらうの句配あるは道
の側は道守かんとて後漢書とて
して本つてある。自今玄關に入
るとこのも道守とて先づ其の利
用のありあるかある

平地に植ゆる庭園は満目松樹と
んが在来松樹とあつたことと自
然とありて雅致ある塔と松林
中とありていんせつが、その七白
然とありてなるとくくくくく
首が松樹と、~~松樹と~~松樹と
なすり秋景のいさゝかの様とて壁と
としてありて金氣とてそのい微
塵とあり

伯の庭つをとおしきうう自今茶の
心ゆかるといから、秦人式の庭の作り
得ぬと云はんは、好し、善も茶

人の心は庭の猫類大のよきを執向
を換らし比と云ふも高の知んれこ
と、此の大庭園も人為と思ひんぬ
やうに自然なるまじりに心んれ彼
西の茶家の遠く及ばまの所れと
云ふれ

一
伯は莞尔とて拙宅へ来た人の善法
も兼ねぬやう人のあるが庭を
見るとんる人の定まり善法も
寝るころの本意のまじり、本社の
庭の野放あゝ家へ表の目か
留まつたのい目今の仕合たるを

と云ふは、萬物皆有情の果相を
とも限らざるあるべし

一
伯の蒲原の在り近年はまんなよみ
ある、蒲原の前面海は背後と一帯
の山がある、その山から水が流れて、寛
疎洋程のまじりの自然の所がある
伯の地を相とんれ、此家も、庭の
の庭下する山の流るまを及んぬ
る

一
作庭の先が何を要する地つる
の手をおく作庭の礎とするのが
明瞭である、伯が蒲原の在り

すまはに葉の先づおを枝かえ
随つて溪谷を滑えたりか、えんを
庭の本とせんれここといふふ
るうらうら、自然の溪谷、
莊の垂るる風致をうておる
溪谷と流れて、伊達、
懸崖として、山々を及んか
みて、鬱樹、未を翳し、
鬱樹、掩へておる丘陵、
爪致ある、
設けんとす、海面の風光、
見見、

葉の鬱樹、
て、
摸て、
つこめる。
あつたと同式の、
る建、
此地、
の、
が眼、
を、
比在、

祝禊の小てあきけんも山海
の風越りて寧ろう海に、今優
つてゐるやうな思ひだ。

北の在に隣つてたうき神社があるも
天を摩す大樹に圍まんと畫一
も暗らいたとてあふが、美んがまの
北在に風波を添くもみる伯ハ
よこし北の縁正も並べんと
感歎を禁し得る

伯ハ岩洲の在に廣くさるといふ
ここはねん比のてあふが、お訪
祈りまの祈り、政禊小祝禊の

よも想像してめ比が、市街に
そらむらぐ地は、三層は
とつが、汗字も岩洲のて
後禊禊作庭のゆきこ
こは、芝押してゐる。

伯ハ往らも可きとるさし、秋味
大を有して居らるることか心だ
又就ては祝ふことか出来て武
弁出身も珍らしい人だ

伯ハ鉄を振つてゐらる、五丁、
甚だ又へるを、雙槩とて
居るとのあまのて、まの山を

登らうと又眼にて行けぬを
連者あや武びある人に振す
るの礼儀の由一くいつも私を
か訪州しをも被るの儀を
玄奥にゆくらしき

伯い古哉の人び何んむキバク
思ふことい語りて一行むささ
やもまんは漢解が起り伯の
迷惑さるりも此の性格が
一あることありあらし

伯の此の性格を以りて長らく
況大帝も奉仕さるればお諫め

申さぬがらぬことい迷難
能んそも敢てしれぬを
諫とさるればと母つとも

伯の物惜しむとせまへ人びあ
いつもや愛花の名研の
鏡をばらしめんと滑川流
ねかん時をい其の名研を
能んは流るるに共くえん
主義も物い其人を得て傳ふ
主義も愛花の研も自分
か流るるの字も花も
を得るとさるるから

あゝ早稲田大とて四ノ境に但
すも孫の籍を定めておくれの
亦比同一主義からなること
あり

山崎伯の志を承る維新者
の志士の遺墨を集めて
千路(ゆきみち)の早稲田
稲田大とておくれの文
庫に帝重あつた
に領つて字の賜りてえん伯が物
に執着がまゝに流石の大度量
に領つて他二例の無い所である。



同上

三架の一

他の一は支那相あり
 三架の一は支那相あり



松林會社記念館の贈三架の一

出ず。小姓より、藤井某といふ者、年が一人あるを
んが執事とあり、此、自合の給仕をもたまふに、
唯れも、漢をもさるけし、萬あるを、つるに、
通つたの心ある。世人が、羨し、存命、七、あつた、大
臣、の、あひ、く、ま、り、を、比、心、あ、ら、う、大、畏、差、の、む
箇中、此、人の、書、状、が、吉、あり、あ、つ、た、は、ん、の、名、義、
か、ら、り、と、お、く、時、大、畏、差、が、信、問、し、た、を、終、し
た、文、意、が、あ、つ、た、あ、の、政、治、も、深、く、つ、ま、り、た、此、時、
か、ら、あ、り、の、地、位、も、あ、り、と、い、ふ、ま、よ、ま、る、も、あ、り、自
か、い、時、お、こ、り、人、を、思、ひ、出、す、け、ん、と、い、ふ、人、
此、人の、任、歴、を、一、向、と、い、ふ、ま、い、の、む、毛、利、家、の、こ
の、人、に、侍、の、大、威、を、聞、合、い、せ、り、と、漸、く、合、つ、た、

名和道一

長藩老臣毛利出雲ノ臣年三十六

道一幼ニシテ聰敏篤ク道ニ志シ四方ニ遊ブ常
ニ氣節ヲ尚ヒ國事ヲ慨ス文久二年屢々京師ニ
上リ力ヲ王事ニ盡ス同三年藩ノ宛ヲ雪カント
有志ノ徒ヲ獎勵シテ曰ク苟モ大義ヲ明ニシ死
所ヲ求ムル此時ニ在リト乃チ出雲ニ請ヒ一小
團ヲ結ヒ宣徳隊ト號ス是レヲ此郷唱義ノ鎬矢
トス又國老諸人ト謀リ尚義場ヲ開キ文武ヲ講
明ス元治元年藩老益田右衛門介等京師ニ入り

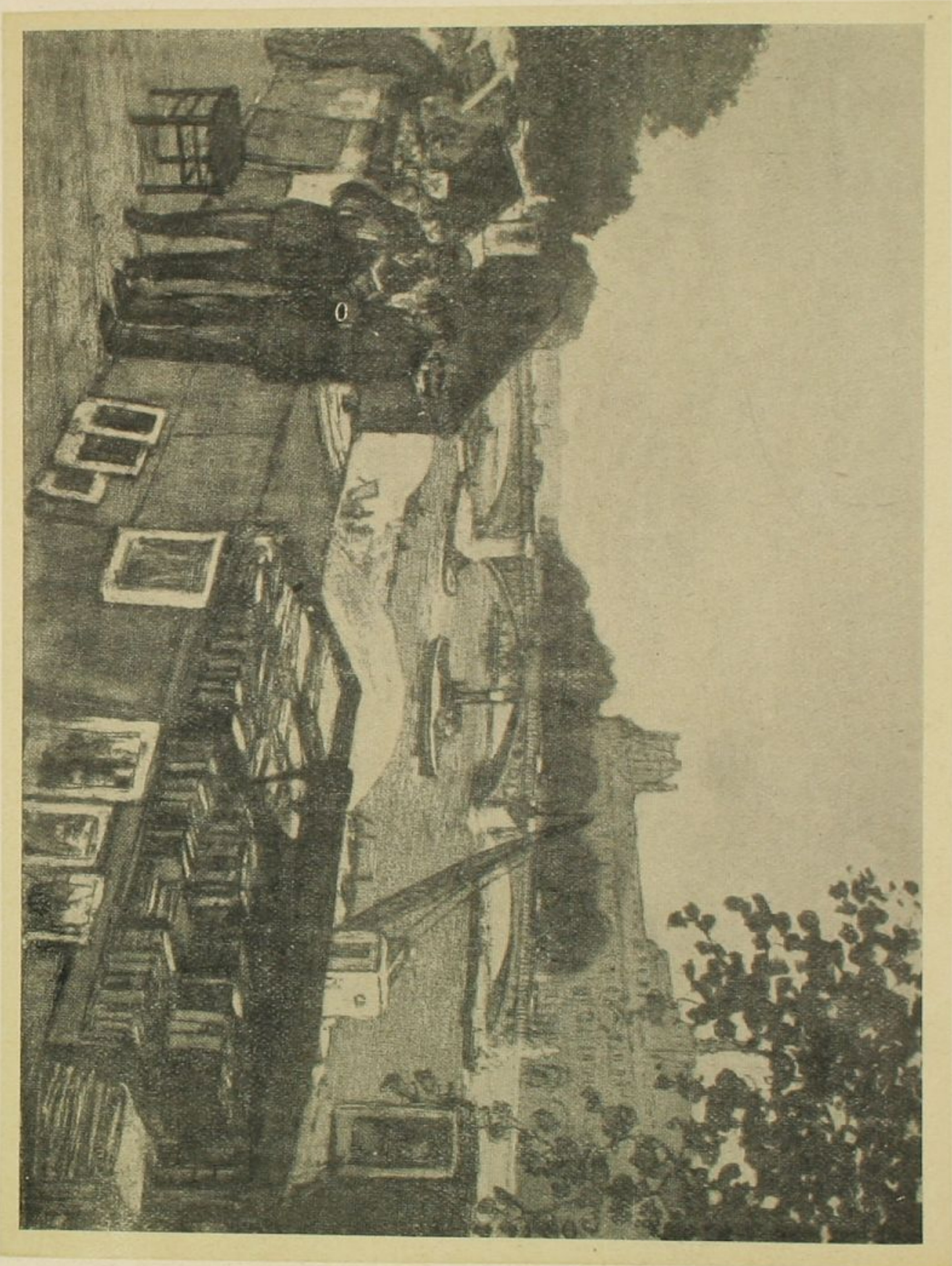
君側ヲ清メントス尚義場宣徳隊ノ人々随テ山城山崎ニ次ス是彼ヤ多年ノ君冤ヲ雪キ王座ニ干城タラントス而シテ賊焰正ニ熾ニシテ事遂ニ成ラス是ニ於テ藩ノ俗論氣焰ヲ得テ正論ノ士ヲ構陷ス道一亦夕座セラレテ修身禁錮セラル會々慶應元年正論黨大ニ起ル高杉晋作遊撃軍ヲ率テ古敷ニ陣ス乃チ道一ノ禁錮ヲ解キ延テ参謀タラシム姓名ヲ改メテ繩緩ト称ス后又今名ニ改ム藩主二人俸ヲ賜フ二年幕兵ノ四境ヲ侵スヤ道一遊撃軍ノ参謀ヲ以テ之ヲ小瀬

川口ニ防テ切アリ明治九年京師ニ入り岩倉相公ニ寓仕シ王事ニ鞅掌ス二年八月新潟縣参事トナル居ル一年ニシテ職ヲ辞ス四年米國ニ渡航シ專ラ民法學ヲ修ム六年空シク志ヲ齎ラシ冒頓府ニ病歿ス

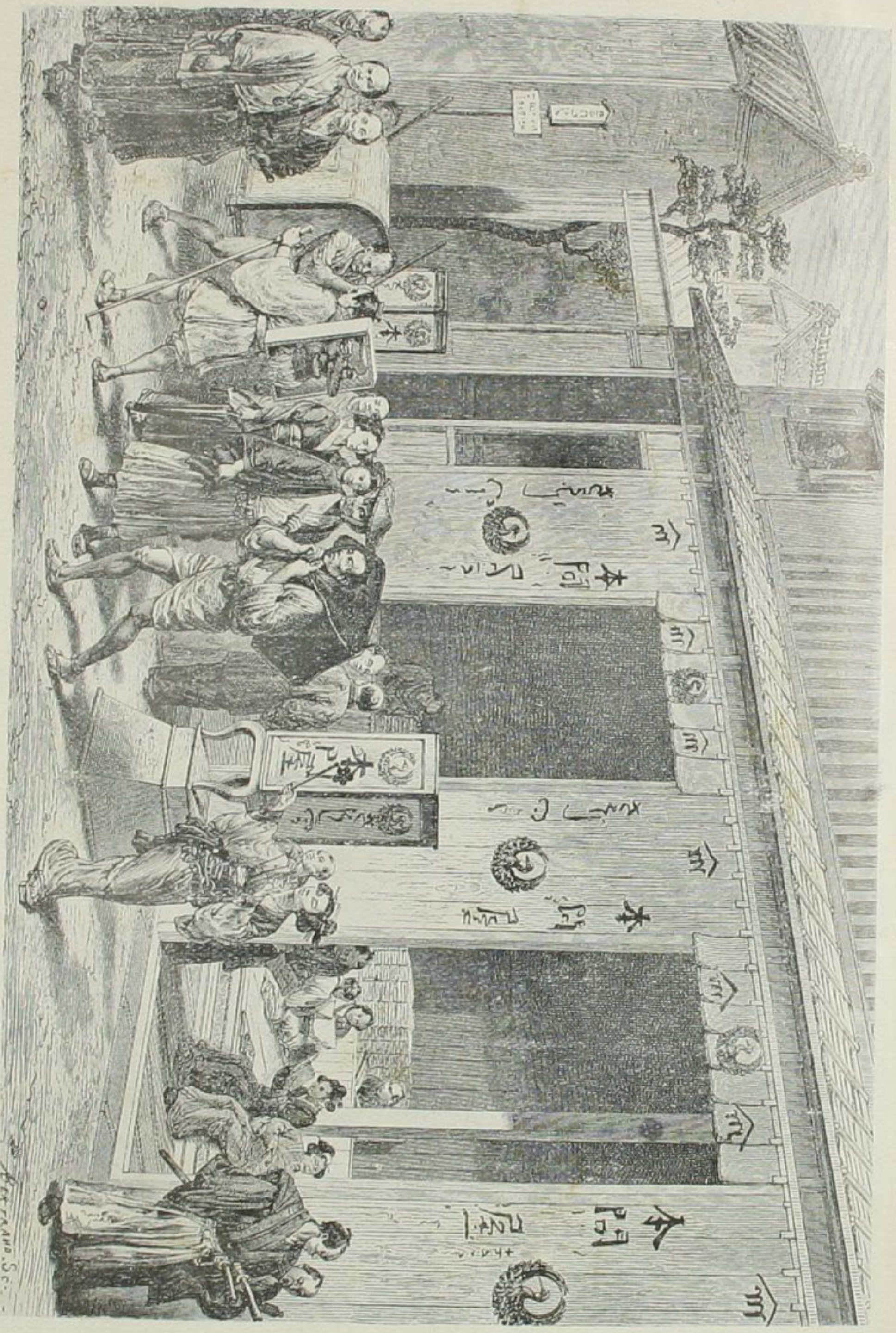
名前の事蹟は略々おきまゐるが家系が明か
 らぬのを遺憾とする。米田源平のことによ
 して小みねが、米田吾公公使使の事記文とい
 ふ名義は洋行して一と一思ひ入ふ。母朝の
 陣屋から、孫藤の母路志時といふ井井が
 井田の相を替へて徳伴一と一思ひ入る。まゐる
 一と一思ひ入ることを今想ひ起す。藤倉の城と
 云ふ所に設けられた。藤倉府の跡に老い家
 家の無き事変は、藤倉の城地のことと
 一と一思ひ入る。藤倉の城地の跡に藤
 倉といふ。藤倉の城地を建てたこと
 がある。

此人の事蹟は、今も藤倉の城地を建てたこと
 がある。

二月十日記



セ イ ス 河 畔 の 古 本 屋



屋 本 の 戸 江 る た 見 の 人 國 外
(先 店 の 門 衛 右 喜 屋 鶴 肆 肆)

This page is a blank ledger with 12 vertical columns. The columns are separated by thin blue lines, and the entire grid is enclosed in a double-line blue border. On the left edge, there are two blue markings: a small triangle pointing right and a semi-circle.

十二行

This page is a blank ledger with 12 vertical columns, identical in layout to the left page. It features a double-line blue border and 12 vertical columns. On the right edge, there are two blue markings: a small triangle pointing left and a semi-circle.

選挙運動の怪文書 端なくも暴露す

政友會本部から公認候補へ 手交した極秘文書？

選挙運動に関する政友會本部の機密文書といはるゝものが偶然にも貴族院の某有力議員の手に入つた。がい文書は政友會本部から各公認候補に對し選挙運動の手段方法に關し記述せるものである。極秘の間に候補者に手交せられたる同本部の虎の巻ともいはるゝ性質のものである。果して右の如き文書密送が事實ならば、議員はがい文書をたてに取つて選挙運動の告警を提起し議場内においてもこれを問題として初音遊に絡まる時影を二掃せん。斷言してゐる事實に徴して今後がい文書は重大なる問題を政界にひき起すものと見られてゐる。

戸別訪問の 怪しからぬ内容の一般

もつとも露骨な文句を用ゐて

右文書は日本紙六枚を綴らしたる。高版刷のものに「選挙」

考へ得ることは容易でない、即ち

發送したことはきい尤が、露骨版のそんな文書を作つて

あす賑かな 建國祭

建國祭第三回は例年の様に明十一日宮中において御慶式の時刻である午前十時十分九段、芝園ケ丘、上野、淺草、深川の各式場で行、その後全員約六萬が宮城前に行進し天皇陛下萬歳を三唱し退散はすであるが、内鮮和團體相愛會員約五百名も制服制でこれに参加する由である。

新團長市來さん あす推戴式

東京少年團では十一日午後一時十五分より日比谷公園芝地において市來團長推戴式、後藤名譽團長歓迎式、建國祭を舉行し團長の祝詞あいさつ、話あり二重橋前で彌樂を三唱して午後三時半頃解散の豫定である。

北洋大飛行

「ハルビン聯合九日發」當地にある勞農ロシア人クラスチンス

東京府 員五人のこ
一、總勢十三人に連してゐる
一、廣島縣 員一人に政民兩派
こも四名第三區定員五人に對し
構である

選挙運動の怪文書 端なくも暴露す

政友會本部から公認候補へ 手交した極秘文書？

選挙運動に關する政友會本部の機密文書といはるゝものが偶然にも貴族院の某有力議員の手に落ちた。この文書は政友會本部から各公認候補に對し選挙運動の手段方法に關し記述せるものである。極秘の間に候補者に手交せられたる同本部の虎の巻ともいはるゝ性質のものである。果して右の如き文書が事實ならば、其議員は、いかに文書をたてに取つて選挙運動の告げを述べし選挙場内においてもこれを問題として初選に結する影響を一番せん断言してゐる事實に徴して、後がい文書は重大なる問題を政界にひき起すものと見られてゐる。

戸別訪問の新手段 怪しからぬ内容の一般

もつとも露骨な文句を用ゐて

右文書は日本憲法を論じたものゝ高麗版のもので表紙には「選挙運動法」に「秘」の字があり内容は左の項目に分れてゐる。

- 一、候補者の選擇
- 二、運動の時機
- 三、言論戦、文書戦
- 四、宣傳戦
- 五、宣傳戦
- 六、地盤の決定
- 七、運動員
- 八、奇效なる運動方法
- 九、戸別訪問の新手段
- 十、補助行爲
- 十一、その他

等であるがその各項にわたつて示された運動方法を見るに全く普通の常識を脱却した露骨なる方法のみでこれが政友會本部によつて案出されたものは常識によつて用ひられてゐる。

文書を提げて 天下に問はん

時機が到れば法廷に

〔某貴族院議員の談〕

右につき同文書入手の某貴族院議員は語る。「余は特に普通選挙に對して甚大な希望を置くが故にかくいふのであるがこの文書を圖らずも手にした余はたゞ如何なることがあつてもこれを提げて天下に問ふ限りである。これは確實に政友會本部から候補者に手交されたもので一筋疑ひのない事實である。費用を支出し得る地方有力者を獨立運動者として利用すること等はたれが考へても餘餘なる手段だに普通選挙のものも新しい精神とする戸別訪問禁止に對して戸別訪問の新手段は何事である……」

否認

政友會本部

政友會本部の青野事務長の談。右について政友會本部に事實をたしかめると、該部は青野守野事務長は代つて語る。「それは初耳だ、もしさういふものが出るのであればさういふ人自身も知つて居なければならぬのだが全然そんなことはなはすだ、何か印刷した書類を違反もあれば違反致さ

問題となつた怪文書

選挙運動方法

奇抜な運動

一、町村長政名ヲ時々打合セテ一類説會場ニ出席セン
ニ、テ有益ナル結果ヲ得タルヲ
三、浴場、温泉、酒場、其ノ他公衆ノ出入スル場所ニ於
テ、人氣ヲ蓄積セシメテ相當好聲ヲ舉ゲテ、
リ（人氣政策）

九、戸別訪問ノ新手段
一、入電網訪。名ヲ振リ入、行商人、新聞類ノ類ヲ刺

あす賑かな 建國祭

建國祭第三回は例年の様に十一日宮中において御慶式の時刻である午前十時十分九段、芝、霞ヶ丘、上野、豊島、池袋の各式場で行進、その後全員約六萬が宮城前に行進し天皇陛下萬歳を三回し退散の時は、そのうち内野、池袋、豊島、霞ヶ丘、芝、各五百名も御慶式にこれに参加する由である。

新團長市來さん あす推戴式

東京少年團では十一日午後一時十五分より日比谷公園芝地に於いて市來團長推戴式、後藤分團長、長成式、建國祭を舉行する團長の演説あり、講話あり、二重橋前で旗を三回して午後三時半解散の慶である。

北洋大飛行

「ハルビン聯合九日誌」當地にある勞農ロシア人グループのキー氏はモスコウ學術會議の下に本年春カムチャツカのベトロポウルク山で北洋飛行を準備して、レニングラードに至る大飛行を執行することに決した。

選挙運動費 七千圓を盗まる

鈴木富士彌氏宅へ 忍び入つた怪泥棒

十日午前一時半、市外港町北谷四九第五區から立候補中の前議員鈴木富士彌氏の宅から和服を着た賊忍び入り、奥八畳に隠れた主人夫妻の枕許にあつた選挙運動費現金七千圓入り折カバを盗取し逃走する際、夫が眼をまじし引捕へようとしたが賊は驚がり姿をかき消した。訴へにより港谷署では直に犯人捜査に着手したが間もなく同町五二先の道ばたに中味を抜き取つた空のカバンだけが落ちてゐるのを発見した。犯人は選挙費用をねらつて忍び込んだものらしい。

振落されたか 疑問の死因

植木屋の惨死から 運轉手等數名取調べらる

前川田が大正村の冬青園から長さ二十一尺、重量千三百貫の植木をトラックで大森へ運送すべく東海道國道原宿へ差かまつた際、自動車の二九二號から人間が車輪に引かかつてゐるに注意され停車して見るに、植木の車輪と共に乗つたのは植木屋鈴木春茂（七）が手足を折り後面部に重傷を負つてはさまつてゐるので直に付近の病院へ收容したが翌日遂に絶命したといふ事件である。

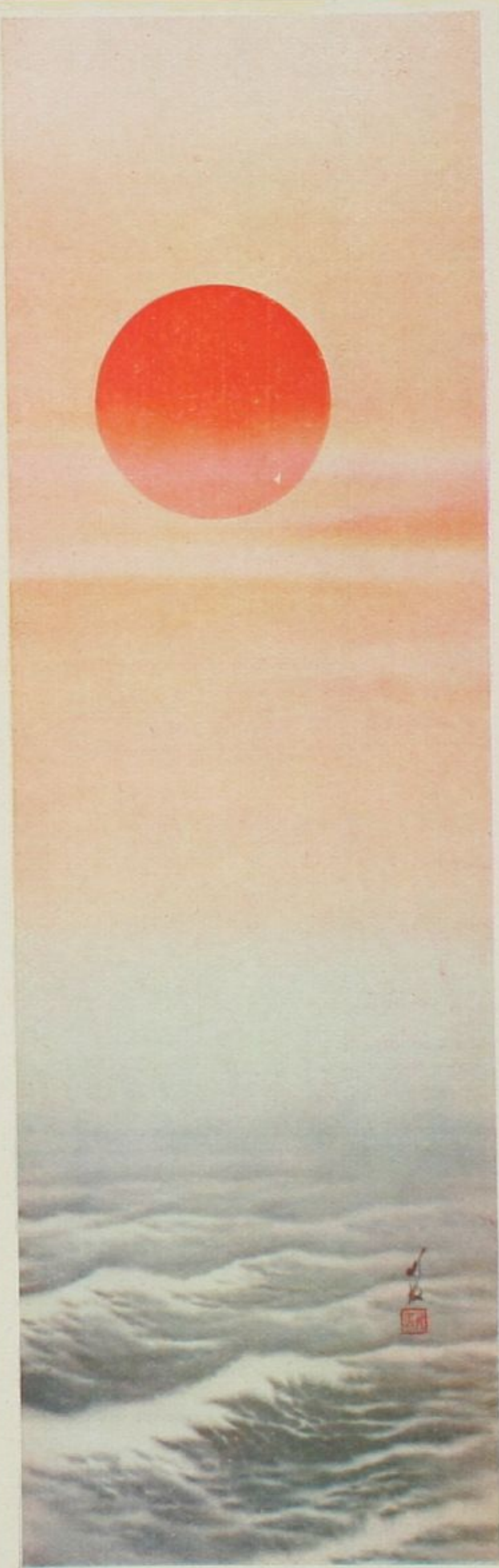
川田の申立によれば、多分振落されたのでせうといふ極めてあいまいなことをいつてゐるが、單なる墜落とも斷言し得ないので、現場その他に向つて調査を開始した。

秘

以下
4 丁
白紙



國寶堂



十二行

